

送律本願念佛集

南無阿彌陀佛 往生之業
念佛之業

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道心歸

安樂集上三問曰一切衆生皆有佛性速却

值人佛何因至今仍自輪迴生死不出小

依聖教長由不得二種勝法以排生

六月號

淨土

本一之何其爲二一謂聖道二謂往生

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために生命を培した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓二十錢の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

東芝 京市 芝國 區地 淨土宗務所

振一 替五 口一 座一 東一 京番

新發賣

一旦一球で健康量



肝油を精製した
純ビタミンAD

肝油が効くのはビタミンAとDの爲だと判つてゐる今日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はありません。本品は肝油から精製抽出したビタミンAとDを無味無臭のグロビュール球に收めた快適な製品——肝油の効果は完全に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製品「研研ビタミン」球は、最近のビタミン學說に據り、一旦二球づゝ服めば完全に生理的健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千D一千國際單位を含有させた製品。しかも「研研」はどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

品切の節は總代理店へ

研製品製

研研ビタミン球

浄土六月號 目次

表紙……………京都廬山寺藏選擇集稿本中法然上人御眞筆（右端）

扉・目次カット……………鈴木金平

論說 華やかならざるもの……………松岡俊三（六）

時局下の生活と經濟道……………笠森傳繁（三四）

宗教的なるもの……………増谷文雄（三）

信仰實話 ポケットの珠算……………金田明進（二〇）

念佛申さぬ叱言は……………吉野翠幹（四八）

効果が望めぬ……………

宗祖靈場 當麻寺奥の院に詣づ……………佐藤賢順（一七）

大輪朝顔の栽培法……………井上貞雄（五）

死後は何うなる……………浄き友座談會（元）

信

仰

相

談

中村 辨康 (五)

富士山麓念佛修養會略記

本誌記者 (四)

隨筆 入

學

佐賀一海 (三)

短篇

思ひ出せない顔

代衣亞和 (四)

會員通信

(四)

隨筆 郭公・三光鳥

吉田絃二郎 (三)

歌

壇

與謝野 晶子選 (二)

俳

壇

太田耳動子選 (英)

待望の書「浄土宗讀本」成る

江藤 澁英 (四)

心經
講義

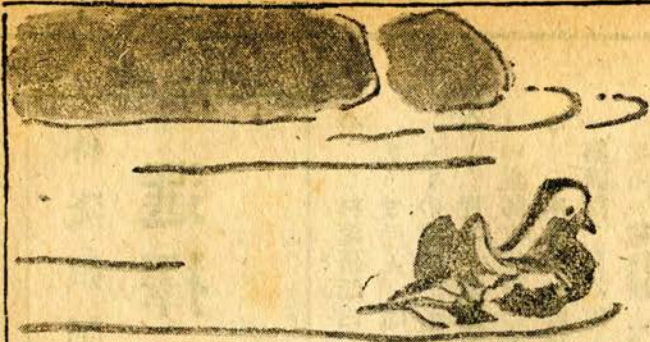
存在相よりも生命相へ

中村 辨康 (五)

編輯後記

(五)

浄土 六月 號 目 次



林隆碩師著

選擇本願念佛集講話

△跋——藤堂祐範師「書誌學上より見たる選擇集」

四六版約二百頁本文九ボ
表紙勅傳「選擇御製作の圖」の
模寫
寫眞版京都廬山寺藏（國寶）
選擇集稿本
定價金七十錢（送料金六錢）

◇……林隆碩師曰く「元祖大師は既に七百三十年の昔、極樂へ還へらせたまひ、その後尊容に接すべくもありません。され、こゝに選擇本願念佛集の存するありて、祖師の法身に面し得るは、眞に長夜を照らすの靈光であります。」と

◇……實にや選擇集一卷は淨土宗の魂であり、生命であります。この集の存するところによつて七百年前の祖師に見參し奉り、吉水の流れが清く濁らず、何時／＼までも流々傳々するのであります。

◇……本書は林隆碩師によつて、昭和十四年一月號から同十五年三月號までの華頂誌に連載された「選擇集講話」を基礎として新に増補訂正を願ひ、更に跋として藤堂祐範師にお願ひし、師多年の御研究になる「書誌學上より見たる選擇集」を附しました。行文極めて平易、在家向としても好適であります。

京都市東山區林下町知恩院内

發行所

華頂文社

振替大阪二五六一二番（知恩院）

淨土

六月號

五百の羅漢あつまりて婆沙論をつくりしに、
九百年に世親いで、俱舍論をつくりて、さき
の義を破し給き、義の是非を論ぜんことは、
あながちに、上古にもおそるまじきものぞ。

法然上人御法語



金



華はなやかならざるもの

拓務政務次官

松岡俊三

—— 華はなやかならざるもの ——

若い時代に健康をそねた私は、一切を捨てて佛門に入つたのであります。然し日露の戦端が開始されますや、直ちに第一線に従軍した事もあり、その後私は操觚界の人となり、更に政界に轉じたものであります。もとこれ淨土の一學徒であつたのであります。

幸ひ皇紀二千六百年の記念すべき淨土一宗の意義ある法會に參列しえた事は光榮と感激の至りであります。

私は、私の今日迄歩んで來た體驗をもととして、少時お話し申上げて、皆さんの参考に資したいと思ふのであります。

世の中には色々様な職業がある。その中には華やかな

るものと、華やかならざるものとがあるのですが、大方の人々は先んじて華やかなる仕事に従事する事を競ふものがあります。

たとへ意義ある仕事であつても、それが華やかならざるものである場合、人はそれに没入する事をよろこびとはしない。

然し乍ら、華やかならざるものにして、而も國家の興隆を來すべき多くの事業が吾々に課せられてゐることを忘れてはならぬ。この時吾々は進んで華やかならざる事業に對して生命を捧げつくことが、國難に處する國民の眞の使命であると考へるのであります。

華やかな事業は、勞少くして直ちに形に現れるものであ

るが、華やかならざる事業は、勞多くして形に現れず、世人の賞讃を寸時にしてかちうるものではありません。精神界の事業も亦言はゞ華やかならざるものである、佛教の教化事業も亦華やかならざるものゝ一つであります。精神界の事業は非常なる信念と、身を以て事に望む覺悟とを必要とします。

—— 佛飯の有難さ ——

私は幼にして一家の離散に會ひ、酒屋の樽拾ひ小僧となつて働く運命となりました。而し更に縁あつて佛門に入り佛飯を食む身となつたのであります。

其後色々と轉じ、今日政界にあつて過去を顧みますとくに、佛飯の有難味がつく／＼と身に沁みて有難く感ぜられるのであります。

佛飯の有難さとは何であるか。それは政界の今日の現状と戦つてゐる私にとりまして、華やかならざるものに突入出来る所の信念と覺悟を植つけてくれたものが、佛飯であるからであります。

私は日露戦争に従軍し、其後直ちに新聞記者となりましたが、當時、今は故人となられた田中義一閣下が大佐の頃

軍事課長をつとめておられました。私はこの人の信念の強さに感じ、この人によつて日露戦争の結末はつけられるであらうと考へたものであります。勿論日露の戦争は明治三十八年を以て終つたものであると考へてはならないのであります。

—— 名を求めぬ大政治家 ——

若しも日露戦争直後に於て華やかならざるものに眞に生命を投げうちうる大政治家があつたとすれば、今日の如き東洋混亂の禍根を斷つてゐたであらうことは想像に難くないのであります。

然し乍ら同胞二十萬の英靈の流した血の犠牲は何であつたか。再び滿洲事變の惨たんたる血なまぐさい事變は何處にその原因を求むべきであるか。

勿論日露の役によつて國家は疲弊した事は言ふまでもありません。

然し乍ら日露戦争を再び起すまじき百年の大計にまで想到するならば、強き地盤を滿洲に造るべきであつたのであります。

當時國內的には十二分の力を用ひたけれども、英靈の血

であがなつた所の満洲に於ては固たる地盤を作りえなかつた。僅かに鐵道の利權のみでは大満洲の建設は到底望みえないのであります。

こゝが、先達の大政治家があるかないかの重大な分岐點であります。即ち華やかならざるものに突入しうる政治家があるかないかによつて國家の發展の成否が決定されるのであります。

滿洲は即ち閉却され、滿人の日本人に對する態度が年と共に變化し、ついには先方より我らに對して衝突をいどんで來る様にさへなつて來たのであります。

こゝにかの滿洲事變が突發する事となつたのであります。なるほど、滿洲に住む日本人は二十萬を數へてゐた。而し、これは多く滿鐵従業員であり、他は一攫千金を夢みる不心得な人たちのみで、眞に滿洲の土とならんとする華やかならざる所に働かんとする日本人は見出せなかつたのであります。

かるが故に滿人の反感を買つたのは當然であります。而もこの時、權識ある政治家が日本に殆どなかつたと言ふ事は、悲しむべきことであります。

華やかならざるものに進まざる爲である。我々は今や前

車のくつがへるを見た。この事變が今後如何様に展開するかと考察しなければなりません。

聖戰の意義

事變出兵以來四年、日本帝國の進んだ所は何であつたか。血と肉で購ひえたものは何であつたか。何ものもない。一木一草一塊の土をも日本は彼から取る事を敢てせぬのであります。

これは佛の慈悲と同様に、何物も求めずに友たり、兄弟たらんとしてゐるのであります。

世界の歴史あつて以來、どこにかゝる態度を敵に持した國があつたでありませうか。復讐を企て、敵愾心を持つのが常である。如何なる戰爭の結果をみましても、戰勝國が敗戰國に對して何らの要求をせぬと言ふ例が他にあつたでありませうか。

こゝにこそ今時事變の特殊性があるのであります。

われ／＼はこゝに佛の慈悲を発見するのであります。弱きもの、苦しめるものに對する佛陀の慈悲こそ私の言ふ華やかならざるものゝ上に輝くのであります。

佛の慈光

私は過去幾十年間東北の雪害救済運動にたづさはつて来ました。東北は現在（五月中旬）でもなほ雪の中にあります。この様な地方は地理的風土的關係から文化的にも相當の懸隔があるのであります。それは又明治維新當時の指導者達の多くが關西の人々であつて、東北の事情にうとく、これら不遇な地方に對する同情を持ちえなかつたが爲でもあります。

佛の慈悲は弱者強者の別はないのであります、而も弱者に對しては強者に對するより以上の恵みを垂れ給ふのであります。華やかならざる東北のあの悲惨なる狀況に對して誰も身命を捧げて救済に乗り出さんとするものがなかつたのであります。

私は東北雪害に捧げて二十年、法律の中に漸く「雪害」の二字を発見するまでに到りました。これは決して私の力ではありません、すべて佛飯のおかげに過ぎないのであります。

私は又雪害運動の一段落を契機としまして、半島人の感化に乗り出しました。半島度し難しと言ふ人々があります

が、彼らと親しみ愛し、彼らと親身になつて語り合へば決して憂ふる事はないのであります。私は進んで此朝鮮の未開の地に赴いて彼らの教化につとめたいと思つてゐます。それは華やかならざる彼の地に進んで行く人が少いからであります。

一文不知の、あま入道

昔、源空法然上人が、あれほどの學徳を兼ね備へ乍ら、而も一文不知のあま入道の輩と稱して一切を捨てて華やかならざる念佛の教化に突入された、あの尊い態度こそ現代日本の精神界の人々に望ましい。正義人道社會幸福の爲に身を捨てゝも、流罪にされても敢て悲しまぬ宗祖法然上人のお姿がなつかしいのであります。

今日物資が不足したと言はれてゐますが、私は日露戰役一年十ヶ月従軍し、コン河をはさんで、零下幾十度の地點にあつて敵と對峙して一週間、その間わづかに一つのにぎり飯を食つたのみでありました。戦地にあつては、銃後の人々も嘔困苦缺乏と闘かつてゐる事であらうと想像してゐましたが、今日のこの様子を見ます時、國民は何かにつけて不足をかこち、悲嘆してゐるのであります。こんな

有様では前線の勇士に對して何と申譯したらよいであります。

勝つて求めぬ聖戰を敢てなしてゐるところの崇高なる帝國の方針に對しては、如何なることも忍ばねばならぬのであります。それにも不拘不平をかこち不満をもらす人々を往々にして見出すのはどうした事でありませうか。それは華々しいものに引かれて華やかならざる縁の下の力持たるところのゆかしい精神を忘れてゐるからであります。

—— 満洲の土となれ ——

私は再び今事變の將來について言ひたい、幾萬の犠牲を無にせぬ爲には、東亞永遠の平和を確保する爲には、非とも満洲の地に確たる地盤を確かねばならぬ。國境の軍隊にはその力に限りがあるのであります。過去の幾多の犠牲を無にせぬ唯一の方策は、日本人たる空虚なる優越感を持たず、東洋平和の土となるべく親しく滿人及支那人と交り満洲の地に土着する以外にはないのであります。樂々暮しをせんが爲に満洲へ移民するのであつてはならないのであります。

佛教で言ふところの色心不二物心一如の生活が望しいの

であります。現代生活に於て往々にしてこのことが忘れられ易いのであります。

日本が過去の歴史に於て、度々外寇の危機に頻して、而も見事に之を克服して來ましたのは、決して單なる天祐神助のみによるものではありません。我々の祖先が、如何にこの狭い國土にあつて海外に雄飛せんと苦心したかの業跡によるものであります。

アメリカは法律を以つて日本人の入國を禁じ、英國は濠州に吾々を入れるゝを拒んだ、かくして幾世紀かに亘る白色人種の有色人種に對する壓迫に我々は堪え忍んで來たのである。我々は單に對抗意識、敵愾心を持つものではないが、こうした白人の無法なる壓迫は天、人ともにゆるさざる人道上の問題である。我らは今こそ八十一字の大理想のもとに有色人種の團結をはかり、白色人種の自覺を大いに促さねばならぬ重大責任を痛感するものであります。

この時、この際佛徒たる諸君が、華やかならざる部面に於て、國家の爲に立ち上らねばならぬ。幸ひこの記念すべき二千六百年の奉祝大法會を期して若き淨土宗徒が、一齊に立ち上つたことをこの上なきよとひとするものであります。



北支派遺軍 殘 邊 岩 太

高波の寄せる海を越え越えてみ
戦せんといふ益良夫のゆく

評 皇國のため、一死奉公の覺悟をもつて、千里の海を越へて征野におもむく兵の悲壯な高い精神が、この一首の裏に波打つてゐる。作者は何の説明も施さず、又感動を露骨にあらはすことゝ突進して、サラリと歌ひのけてゐるのである。

長野縣 靜 金

信濃路は春おそくして淺間山ひだ
に白かり残りたる雪

評 國春四月といふに、山國の王君である淺間の山麓には、まだ残雪が白くかかつてゐる、作者はそれをしみにみとみつけてゐるのである。

朝 鮮 盤江 八年 坊

春の月青く牙えつつ夜櫻を照せば
影も濃くあるかな

評 春の月といふと、すぐおぼろ月を聯想しがちである。殊に櫻花の上にはこの月でなければ歌にならぬやうに常套化されてしまつてゐるが、これは青く澄み渡つた玲瓏たる春の月に照り映じて美しい夜桜を出してゐることを意識したものである。

東京市 三野 輪 幸節

雨上り河口の舟に影落とし鳥飛び
立つ春のゆふぐれ

東京市 三野 輪 幸節

福岡縣 三浦 壽子

母君の腕に抱かれ入場の遺骨をお
がみ涙こぼれぬ

香川縣 荒 木 はち

此の春は花に濡くむ人もなし戦さ
を思ひつつしめるかな

山梨縣 岩 間 久 次

天地のめぐみ豊けし山里に小麥も
伸びぬ草も萌え出ぬ

栃木縣 大 輪 可 海

丸き月君の家をば照すかなみかへ
り勝ちにわが歸るとき

徳島縣 丸 岡 長 壽

汝れの名を書きとどめつつ幸ひを
祈りし日など忘れがたけれ

金澤市 田 水 多 四郎

山々の雪解けにけりふもとには嵐
染の櫻今盛なり

東京市 三野 輪 幸節

雨上り河口の舟に影落とし鳥飛び
立つ春のゆふぐれ

東京市 三野 輪 幸節

瀟湘の山のぼりゆく朝明けに合戦
の若葉はひらき初めけり

富山県 安田 保治

この春は雨ふことの忙しくて思ひ
のままに歌も詠み得ず

京都市 水田 七郎

犬の手も借りて家移る雪の朝動行
忘れぬことぞ嬉しき

小樽市 正 金

初夏に近きあかつき細雨してここ
ちよきかな新芽伸びなん

久留米市 佐 藤 眞 宏

弟が白衣をつけて歸還する心を
思ひ離せまるかな

東京市 淺井 まさ子

待ち兼ねし軍事郵便ききも無事
なる友をわが喜びぬ

大分市 吉田 公 介

興りゆく國の榮えを見る日まで乏
しきものも耐へて行かまし

小樽市 中村 も め

嗚呼紀元二千六百年の春興亞の御
代に逢ふを嬉しき

北海道 寺田 眞 山

高高とみ鏡をかぐみ民われ生け
る幸ある今日のよき日に(天長節に)

京都府 望月 久次郎

中支派遺軍 時 岡 秀 雄

戦に出で立つ友の無事なれと後
姿をみつづてがみぬ

野野海軍病院 宇 都 隆 徳

昨日のごとき戦友を偲ぶかなは
や二年を過ぎしなれども

福岡縣 一向 山 大

山里の春の祭りの太鼓の音びびき
わたれど何かさびしき

北海道 花田 順 住

かちどきをあげてかへり益良夫
のいくさ話に夜ぞ更けにける

和歌山縣 奥村 映 水

しばし日を雲の還へばそのひかり
磯ぎんちやくの花に似るかな

金澤市 有 側 芳 子

静かなる心求めてさまよへど樹々
の青葉に戀しみの湧く

中野區 三浦 禎 子

たまさかにりんご買ひ来ぬ甘き香
をかぎつつ遠きふるさとを思ふ

東京市 長 島 洋 生

冬枯れの小菊みだるる夕庭に音に
に立てず時面ふるなり

東京市 長 島 洋 生

投稿規定

はがきに二回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係にて送ること。



▽大阪・徳島の巻△

宗教的なるもの

—— 青年の宗教(二) ——

大日本聯合青年團總務部

増谷文雄

思はぬところで、ふと宗教的なものを發見することほど、いまの私にとつて嬉しいことはありません。

四月の終つて、私は、大日本青年團の仕事で、大阪で青年團關係の人たちばかりの座談會を司會しました。その席上で、大阪でも有名なメリヤス商の御主人の中川伊作といふ人が、自分の商店の商標のことを語つた話しが、ふと私の注意をそゝりました。

中川さんは、こんなことを話しました。自分の店の商標は「蜂」であります。これには、いささか自分の商道に對する理想がこめられてゐるので、すこし説明さして貰いたいと思ひます。元來、

蜂といふものは、御存じのやうに、花の蜜を吸ふことをもつてその努めとしてをります。終日、勤勉に、花から花へと飛び廻つて蜜をあつめてをります。その態度は、自分たちの以て職とするに足るものと思はれます。營々として業務にいそしみ、小利をつんで大利となすこと、まさに蜂の蜜を集めるがごとくでありたいと思はれます。しかし、自分が「蜂」をもつてわが店の商標となし、この「蜂」に學ばんとする點は、更に他の點にあるのであります。それは、この蜂は花から蜜を吸ひ集めるのであるが、その花に對しては、少しも害をあたへ、その色香をそこなふやうな事はありません。むしろ、その花の實を結ぶ作用を助けてゐるのであります。これは、自分ども商人にとつては、實に大いなる教訓を含ん

であるのであります。私は、どうぞ靈敏に働いて利をつみたいと思ひます。これは商人としての當然のことです。

だが更に願はくば、この商行為が決して人々の利益を害するものでなく、更にすすんで

は、人々の利益厚生之道

をたすけるものでありた

いと思つてをります。

中川さんが、さう言つ

て話してをられるうちに

私はふと、その話の中に

宗教的なものひらめ

くのを感ぜずにはゐられ

ませんでした。そこで私

は、中川さんに、さうし

た考へ方をどこから得ら

れたかとお尋ねしまし

た。すると中川さんは、

「なに、いまの話は遺

教經にかいてある言葉から教へられたものですよ。」

と言つて、遺教經の中の文句をすらくと口誦んで教へてくれ

ました。私は、この遺教經の言葉を商標に生かしてゐる中川さん

一粒の米



の顔を、まざ／＼と見つめてゐるうちに、なんだか、他國で故郷の古い友に會つたやうな懐かしさを感じずにはゐられませんでした。

二

やはり大正村長殿の仕事で徳島に行つた時には、四國の名刹大龍寺の島村僧正が、郡の青年團の團長といふ資格で、私どもの會に出席してくれました。

島村僧正は、私の畏れ多い宗師と同宗であり、かつ同年齢とのことで、高僧のこともを中心にして、いろいろ話題をもつことが出来て、こゝでもまた、本當に、他國で故友に會つた思ひをし

たことでありました。

この島村僧正は、いま、自分の團長たる郡青年團を中心にして、「一粒の米」といふ運動をしてゐることでしたが、その運動

について、島村僧正は、つぎのやうに説明してをりました。

いま自分たちは、いろいろの物資の不足に當面して、物資節約といふことを考へさせられてをります。殊に、米の不足の結果から、一粒の米をも大切にしなければならぬことを痛感せしめられてをります。だが私は、こゝで聲を大にして、諸君の深甚なる考慮を促したいことがあります。それは、物が足りないから物を大切に、米が足りないから米を大切にするといふ考へ方から、更に歩一步をすゝめなければ、本當の人の道が立たないといふ事でありま。

われ／＼は一粒の米を大切にしなければならぬ。この考へ方を本當に徹底せしめるためには、われ／＼は先づ、一粒の米の恩といふことを思はねばならぬのです。足りないから大切にするといふ考へ方は、これをその裏から言へば、餘つた時には大切にしないことになるのです。それでは、人の道にはづれるのみならず、本當に食糧問題を解決する道ではないことを知らねばなりません。一鐵を輕んずる者は一鐵に泣く。一粒の米を輕んずるものは、きつと一粒の米に泣く日が来るに相違ない。たゞ、一粒の米の恩を知るものゝみが、その憂目をまぬがれうるであります。

島村僧正の説明が次第に熱をおびて来ると、會場の人々は、いふこととなつて耳を傾けました。物資節約といふことが、いままでの打算的な意味をすてゝ、宗教的な意味をもつて、渺々と人々の

胸の中にしみ込んで行つたやうでした。

朝から續けられた會合が、正午になつて一應の休憩となり、みんなが豐の食事の席についた時、先づ島村僧正の導きによつて食事詠が詠へられました。

「一粒の米の恩は……」

島村僧正の聲のあとから、みんなが聲大からかに食事詠をとなへる聲が、會場の空氣を嚴肅にゆすぶりました。宗教的なものが部屋一ぱいに満ちました。私は、あの時のことを思ひうかべると、今でも、何となく身の引しまるやうな氣を覺えるのです。

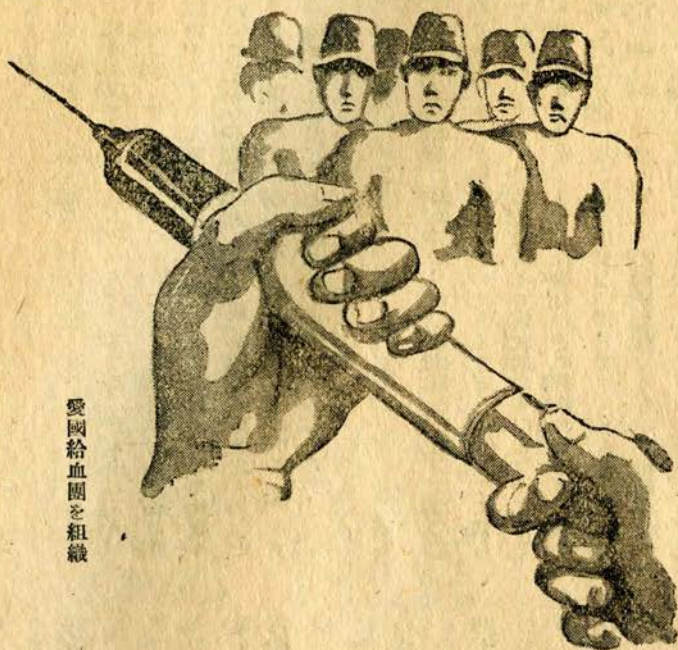
三

一粒の米のはなしは、前に言つた大阪の會の席上でも出て來たものでした。節米運動は宗教的なものなまでに持つて來なければならぬといふことを、誰でもが、意識的に、また無意識的に考へてゐるやうに思はれます。

大阪の船場といふところは、古くから大阪の商賣の中心となつてゐるところで、東京で言へば日本橋にでも當りませうか。さまざまの卸賣や貿易商が軒を並べてならんであります。その老舗の御主人の竹内新次郎といふ人が、船場の舊いならばし等を話された中に、こんなことがあつたのを忘れることが出來ません。

自分たちは、競争のはげしい商賣の中心に住んでをりますので、

頭を擡げるもの、没落してゆくもの、その交易のはげしさに、浮世の感をしみじみとなめさせられます。その浮世の波風をのり切つて、没落もせずに生残るためには、並大抵のことでは行きませ



愛國給血團を組織

ん。それは、利にさっと立廻るといふ許りで行くものではない。身をつゝしき生活をつゝしんで、その餘蘊として世の荒波に勝たして頂かなければなりません。そんな考へ方から船場には船場らしい古いいきりがあるのです。

店ものを四五十人も使つてゐる店では、朝ひる晩の食事を他からとるところが多いのですが、その辨當の食べ方などについても、いろいろと噓しいいきりがあります。

自分が手をつけた辨當は、一粒のめしも残してはなりません。飯を食ひ残すやうな勿體ないことをする者は、到底立派な商人になる資格はないといふ考へ方です。もし最初から、到底たべ切れないと解つてゐたら、手をつける前に分けとつておいて手をつけるのです。

さうした竹内さんの話をききながら、私はすぐ、ここでは、米飯は決して身體をやしなふ單なる物資として取扱はれてゐないことを知ることが出来ました。米は菩薩さまである。その考へ方があるから、はじめて御飯に對して勿體ないといふ考へ方が生れて來ることが出来るのです。御飯だけではない。おいもに對しても、おかゆに對しても、船場の人々はおなじ考へ方をもつてゐるのです。だから、この界限の人々は、おいものことを「おい

もさん」といひ、おかゆのことを「おかゆさん」と言ふのだと聞かされました。

むろん、かうした考へ方は、大阪船場に限つたことではありません。米は菩薩さまただといふ考へ方は、嘗ては、日本中の人々がもつてゐた筈です。それがいつの間にか、西洋流の物質主義の考へ方におされて、大抵忘れられてゐたのです。だが、いま物資不足、わけても米の不足に當面して、禍を轉じて福となすのたとへで、もう一度この尊い考へ方を日本中の人の胸の中に蘇らすことが出来たならばと、いま私は必々と思つてゐるのです。

四

若い人たちは、本當に眞面目に、いつも純眞な心もちで事に當つてをります。それが宗教的なものであるなどは、決して知らないでゐるのですが、自然法爾にして宗教的なものとなつてゐることが尠くありません。さうした場合のその行爲の美しさ、尊さは、何ものにも譬へることが出来ないほどです。名古屋や大阪では、青年團の中の有志たちで、愛國給血團なるものが組織されてをります。戦場で血をながして、傷兵としていま故國の軍事病院にゐる人の中には、しばしば輸血を必要とするものがあります。しかし新鮮にして適當なる人の血を、隨時に得ることは決して容易なことではないのです。だが、適當な血が得られなかつたため

に、皇國のために傷いた人々に、もしものことを有らしめてはなりません。そこで、青年團の有志たちで、いつでも必要な血を供給しようといふので組織されたのが、その愛國給血團の成立です。聞けば、この團の人々によつて供給された血は、すでに六萬グラムとかに上つてゐるとのことです。

この話を聞いた時、すぐ私の頭の中で聯想されたものは、かの餓えたる虎に身をなげ與へたといふ佛教修行者の話でした。佛教の慈悲の心の發するところ、餓虎に捨身することをも敢て行はねばならぬとするのは、佛教説話の極端な表現でありませう。それに對して、傷ける皇國の勇士のために自己の血を獻げやうといふのは、すこしも劣らざる宗教的な態度であると思ひます。

その他、禪勞奉仕のことにしても、木炭増産の運動にしても、出征家族の扶助にしても、それを本當に眞面目に純眞な心持でやつてゐる若い人々の態度は、まさしく宗教的なものであります。が、しかも、御當人たちは、それをさうとは知らずして行つてゐるのです。だからして、いよいよその態度に尊さが加はるわけです。さうした青年の美しい宗教的なものを、私は、もつともつとこの誌上に紹介させて頂けることを、この上もない喜びとしてをります。



法然上人
靈場
當麻寺奥之院に詣つ

佐藤賢順

大和ではよく雨に降られる。二三年前四月の末に、奈良に來た時も、途中から雨になつて、絹糸のやうな美しい雨が、大佛殿を、若草山を、興福寺の五重の塔を包んでゐた。東大寺の門前で、奴蛇の目を買つて、その静かな雨の中を、西大寺や藥師寺のがまで見物した。西大寺では古びた土塀に雨が注ぐのが何とも言へず柔らかであつた。

今度もまた大和へはいつた頃から雨になつた。が、それは決して穏やかな雨ではなく、風さへ少し加はつて、荒々しく衣を打ち、白く重吹を上げる。参急線の長谷寺驛を降りると、慌てゝ前の茶店へ飛び込んで、今度もまた奴蛇の目を買つた。牡丹で名高い長谷寺に詣でようとしてゐる。

何百段かの石段がそのまゝ、階廊になつてゐて、そこを上りながら兩側の牡丹を見てゆく。盛りにはまだ四五日早い、それ

だけに尚更若々しく見える牡丹の、何百株となく色とりどりなのが、雨に濡れてゐる景観は實に美事である。

長谷寺驛へ引返へすと、また参急線で二つ先の驛の室生口へ降りた。雨は時々止んでは時々ひどくなる。それにつれて、私の氣持も行かうか、思ひ切らうかと幾度か迷つた。室生口へ降りた目的は、こゝから一里半の山奥に建つ弘仁期の唯一の伽藍室生寺を見學したかつたからである。そこがまた、宇陀川を渡つて室生川に添つて、柿の中を上つた幽邃の地で、バスも二時間一回しか通はない所なので、とうてい晴れさうもない雲行きを仰ぎ見ると、折角その驛へは降りたものの、迷はざるを得なかつた。

然し因縁は恵まれてゐた。私はやがて、奴蛇の目を翳して、全山今を盛りと咲き誇る石楠花の花を堪能しながら、室生寺の



香蒸した石を上つてゐた。薄暗い金堂、灌頂堂に立ち並ぶ弘仁時代に製作された佛達のお顔や肩のあたりや衣紋に、光背に、蓮華座に、心には許さず給へと念じながらも、無遠慮に大きな懐中電燈をつきつけて、一千餘年前の時代の息吹を感じようとするのであつた。

杉の大樹の生茂る山を背にして一千餘年を立ち續けてきた五重の塔は、金堂と共に、弘仁時代のたゞ二つの建造物である。その高さは相輪を加へてもまだ奈良の大佛様よりは三寸七分も小さいといはれるが、簡素で境線の取れた纏つた美しさは比類がない。横に廻り後に廻りして雨の中を長いこと歩いた。奴蛇の目が大變に役に立つた。

それから一日置いて、また私は大和へはいつた。今度は大隅から大總線で富麻寺驛で降りた。この日は雲一片ないほどの快晴で、丘も光り水も光り、新緑は大手を擲けて空を仰いでゐる。

驛から富麻寺までの六七丁の道が乾いて白い。兩側に所々土産や食べ物賣る店の並ぶ狭い道を、参詣の客がぞろ／＼と續



くので私は意外に思つた。想像してゐたところでは、圓光大師（法然上人）二十五靈廟の第九番、富麻寺奥之院往生院は、交通不便な山奥であらうなどと思つてゐた。攝津の勝尾寺や龍王寺に参した望生寺の追憶が、知らず識らずのうちに往生院をそんなふうちに私のうちに描いてゐたのであらう。

富麻寺の境内は一萬二千餘坪といはれ講堂、塔を合せたら建物の數も幾十に上るといふ廣大な構である。仁王門をはいると、こゝも境内至るところに牡丹があつて、今が真盛りである。その間を賽客が雲集し、物賣りが客を呼ぶ、右に講堂、左に金堂を見て登つた。正面が曼荼羅堂で、こゝに中將姫が蓮の糸から續つたと傳へられてゐる藕絲曼荼羅が奉安してある。これが名高い富麻曼荼羅で、淨土慈關係の美術としては日本最古のもの（天平時代）である。觀無量壽經に説く所の極樂の教主、莊嚴十三觀の定善、三福、九品などを圖示したものであるから、觀曼荼羅とも呼ばれる。この曼荼羅が如何に強い信仰を民間に今もなほ確保してゐるかを知つたことは喜びの一つであつた。然し現在曼荼羅堂本尊として掲げ、一般に拜觀させてゐるもの



は、文龜年間（足利時代）に模寫した文龜曼荼羅であるが、それですへもまたと得難い作品である。

曼荼羅堂を更に登れば、すぐに奥の院（往生院）である。現在に當麻寺は眞言宗、淨土宗兩宗の管理になつてゐて、こゝは淨土宗に屬してゐる。こゝの正面には、法然上人のお木像が御安置されてゐる筈である。この像については古くから興味ある説話が語り傳へられてゐる。それをそのまま受取つて、今の言葉に書き直してみると、「大和名所圖會」などの言ふ所ではからである。

法然上人の御遺像は、もと京都知恩院に安置して長い年月を経たもので、實は上人御在世中に桑原左衛門入道といふ人が、上人の御教によつて專念の行者となつた報恩の爲に刻んだのである。これを上人自ら開眼し給ふと四十八度に及び給ふたといふ。それから、時は下つて、知恩院第十二世誓阿上人は或る夜、不思議な夢を見た。夢にこの遺像が現れて、「我が本地は當麻寺の曼荼羅なり。かしこに移し掛えよかし。かの曼荼羅堂の乾は入功德地にして、千世の青蓮華あり」と教へ給ふたかと思ふと夢が醒めた。そこでこの地を捜し當て、一字を開創し往生院と名づけたのだといふ。知恩院の方の記録によつても、誓阿上人はこゝに隱退して往生院を創立なさつて、應安七年に七十八で亡くなられた。兎に角、誓阿上人と結びついた傳説の

木像がある筈である。

また、「華頂諸要」の記すところによれば、京都に災禍の多いのを心配して、朝廷に奏上して、上人の影像一軀と勅修御傳の歌本を護持して、この往生院をお立てになつたと傳へ、その上人の影像一軀は「御自作三軀の内」の一つであるといふ。この御自作とは上人御自作の意に違ひはなからうから、こゝに御安置するものは、上人御自作に外ならないといふことにならう。

またかうも傳へる——誓阿上人が受けた夢のお告げは「我が籠に釘を打ちしものあり、苦痛堪えがたし」といふ驚くべきお告げであつた。翌朝、驚いて拜すると、なるほど籠に竹釘が打ち込んであつたので、直ぐにお抜き申すと、恰も眞の身體から血が流れるやうに、そこから血が流れて、今も、御廟にその血の跡がついてゐると。

扉は開かれた。厨子の中には動く光る坐形の尊容が親しく拜されたのである。

『あれが血の流れた跡です。』と語る寺僧の言葉に、見上げると、なるほど左頬にそれとも思はれるものが窺はれる。信仰説話がどんなにして生れてゆくかを察することは興味が深かつた。

なほこの寺には法然上人が所持なされたといふ百八の梅檀念珠、木蓮華、殿の麻の袈裟を傳へてゐる。所傳をそのまゝとして、これも懐しいものである。



… 身 邊 感 話 …

ポ ケ ッ ト の 珠 數

金 田 明 進

ポ ケ ッ ト の 珠 數

先年、私の町の出身者である歩兵伍長の森田君が戦死せられ、その遺骨が東京の親戚の家に無言の凱旋をされましたとき、私の町からも町長さんや分會長さんが出迎ひの列に参りました。ひろい浅草の十間道路の兩側に、民や各種團體が市旗をかゝげてお迎ひして下さいました。その道路の真中を遺骨を奉持した遺族の列が長くつどきました。私も苦提手の和尚として参列しましたが、そのときわが町長さんのモーニングの端然たる姿の右手に、ひととき目立つたのはお日課のお珠數でした。

洋服にお珠數のすがた、それはまことにそ

の人の敬虔さを示すものです。ところが私は

ときどき務めの都合で洋服を着ます。そのとき私はお珠數を持つてゆきます。しかしそのお珠數はポケットの中へ収めてゆくのが常です。汽車電車バスの中では、背廣すがたですまして、まるで「誰が和尚だ」といふ様な恰好で、珠數はポケットにひそめて、すましてゐることが多いのです。

先日、私の寺で町の有志の方々が早朝から集つて、吉原自覺上人を中心に一日の念佛結衆を賜きました。そのとき吉原上人からある高貴のお方が常に念珠を離し給はなかつたお話がありましたので、座談會の折に、同行の高山さんが次のやうに語られました。

「私は久しい前から役所に勤めて居ります

が、いつもこの洋服の袖口にお珠數をかけ、おちて來ぬやうにトメ金をはさんで居ります。私はお珠數をポケットに忍ばせることは勿體ないと思ひますので、いつもこの手首に離しませぬ、風呂に入るとき以外は離したことがありません、そして常にわが心の放逸を戒めて居ります。」と。

このお話をきいて私は自らを深く恥ぢました。僧形をしてゐればこそ手に珠數を離さぬものの、中學の教壇に立つとき、所用のため東京に出るとき、洋服を着ては、珠數を有たずに、或は之をポケットに忍ばせてゐたことを、本當に恥づかしく思ひました。

珠數は佛徒のシンボルであり、念佛者の尊き印であります。念佛不斷なれば日課珠數も不斷であるべきです。珠數常に身をはなさず、常に念佛者の自覺に生きたいものです。

私は、わが町長さんのあのモーニングの手に珠數をかけられて都大路を歩かれた姿を思ひおこし、又高山さんのポケットに忍ばさぬ珠數のお話をきいて、わがあさましさに驚うた

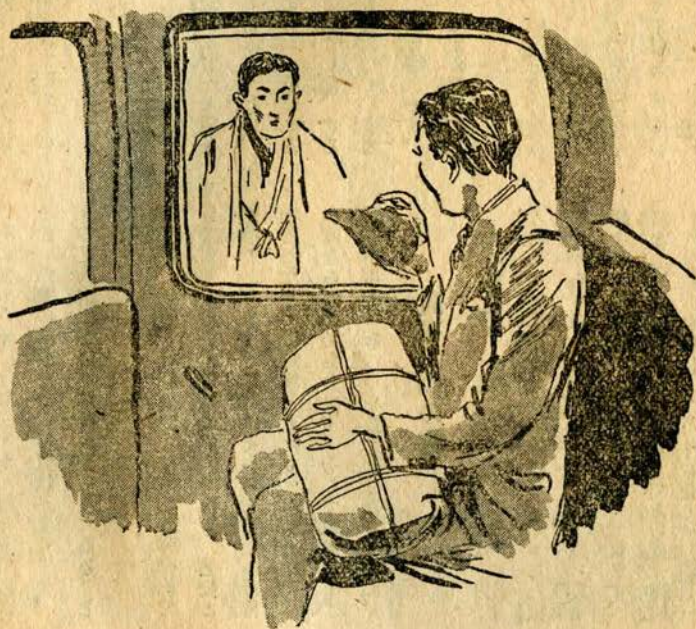
れるのでした。僧形にも珠數、洋服の手にも珠數、手常に珠數を離さじと固く固く心に誓ふのでした。

尊像

これは先日私の地方に巡教においで下された京都伏見の五島僧正から、その寺の人に注意されたお話の中で承ったことです。

五島僧正がかつて米國に居られたころ、あるとき米人の家を訪れたら、その應接間に奈良の大佛さまの模像が置かれてある、よく見ると、それは單なる像でなく、その御頭に電球が仕掛てある、何のことは無い、それは電氣スタンドに用ひられ

てあつた。そこで五島師は心平かならず、やがて現はれ出たその家の主人に話しうわが國



でこの大佛さまは國家國民の崇拜の對象であ

る、この崇高なる佛像を電燈の道具に利用するとは何事だ」と大いに戒め且つ談じ込まれたところ、その主人は深くその非を悟り「シエム、シエム」と心から詫ひて、即座にその器具を除いて非を改めたといふことです。

どうかすると、私共の知人の間にも、佛像を、菩薩像を、崇拜するといふより、床の置物としてゐるのを見受けます。かかる場合信あるものは嚴としてその非を悟らしめ、佛像を嚴かに奉安するやう注意せねばなりません。

私の幸に數年前まで長い間お預りしてあつたお厨子入りの三尊佛がござりました。もう古いもので修繕もしないので動かすとボロボロ解體するほどに勿體なくなつてゐましたが、預りものですから、本堂の隅にソット納めておきました。ところが忘れた時分、その持主と、新たにお引受けするといふ東京のある辯護士の人が來ました。

この辯護士は多くの佛像を蒐めることが趣

味であるが、一俵一俵を決してお粗末にはせぬ、家にある幾多の佛菩薩像は、一々自分の信仰の對象として朝夕に供奉申上げてゐることでした。

そのとき、さもあらんと私は感じました。

それは、いよいよその預つてあつた三尊佛を詳細に見識べられてから、破れ損じたお厨子にていねいに纏め、毛布にお包みしてから、それをゆはく紐をさがされました。そばにゐた爺やが、新しい紐を持つて來ました、するとその辯護士なる紳士は、手を合せて、紐はおやめ下さい何か他の紐を、と申されます。私はこの有様を見て、ドキツとわが胸を打たれました。

私ははいそいで奥へ行つて、いろいろの包みを解いた紐を集めて來ました。すると辯護士は、うれしさに、その一つ一つを結び合せて長くして、お厨子の廻りを丁寧にゆはいて、やがて用意されたハイヤーに、その大きなお厨子の包を、大事にわが膝の上に抱へて乗りました。そして持主より買ひ取つて東京

を指して歸りました。

その後五六年になります、毎年正月にはこの一面識の辯護士から年賀狀が参ります。きつと鄭重にかの三尊佛は祀られてゐること

でせう。

佛像、佛畫、それは決して單なる彫刻物でも繪畫でもない、信仰の對象であり、歸依の對象であります。私共はそれらを單なる愛玩物としたり、觀賞物としたりする誤りを匡さねばならぬのであります。そして敬虔なまごころからその取扱ひを致さねばなりません。

財布の中の緒

このあひだ、小雨のふる日、私は町に出ようとして停車場近くの坂道にさしかゝると坂の下から十五六歳の男の子が、高下駄の前鼻緒を切らして困つた足どりで上つて來ます、私は懷の財布の中に用意してある皮の緒紐をすぐさま取り出して、その男の子に與へました、男の子は田舎の子ですから口かずはきませぬが、とても嬉しさに顔に笑みをた

へて前鼻緒をすげて、かへつて行きました。

この一見、氣のきいた財布の中の緒紐は、私が故人となつた道友川島さんに教へられてそれ以來、いつも財布に一つの緒紐を入れて置く心掛けとなつたのです。川島さんは、昔は随分わがまもので、親兄弟をこまらせた人ですが、中年、樞尾先生のお導きで教への道にいのしむやうになり、嫉苦嫉妬、法政大學を卒へ、佛道にはげみ、私共と一緒に隨分修行をし、つひに佛門に入るを志し、私の寺に留り、熱心に修業され、人をすゝめて念佛を共修し、大いに將來の教化運動への盡力を約しつゝあつたのですが、不幸一昨年の早春に中京の教化線上で急逝されたのでした。

この川島さんは、自らすすんで、人のいやがるやうな仕事を、たとへば便所の清掃や、下足番などをよろこんで奉仕されるのです。そして道を傳弘するためによろこんで私等にその機會を作つてくれるのでした。私の寺へ來てからも、わづかな間に近所の人々をすゝ

めて朝のお念佛に参加させたり、部落の子供

を集めて教團をひらいたり、とても熱心でし

た。

この川島さんの財布にはいつも必ず一個の煎鼻緒のすげ換への緒が潜められてあるのです。私はあるとき川島さんにそれを見せてもらつてとても感激しました。これは他人が道で切れてこまつた場合に用意されてあるとのことでした。わづかなことです、が、常に之をわが懐に用意されてゐるとは何と美しい心掛けではありませんか。

今、とかく我がふところの利益のみを考へたがるときに、口には滅私奉公を稱へながら内心利己の闇をおよく人多きときに、この小さいながら、常に「他

人のために」とわが懐にすげ緒を用意してゐられた故川島さんを思ひ出すと、ほんとうに清涼感をのんだやうな気がします。私はいつも忘れずに、川島さんの遺訓をこの「皮のすげ緒」にとどめて、懐にするやうにしています。それが先日偶然にも役立つた時、この小さな善行の果せたことに、限りなき故人の感謝を覺えたのでした。念佛の友のまごゝろの尊さに涙さへ催したことでした。

(齋藤清畫)

淨き友の會 信仰坐談會案内

(六月分)

日時 六月 九日(第二日曜)
廿三日(第四日曜)

午後七時より

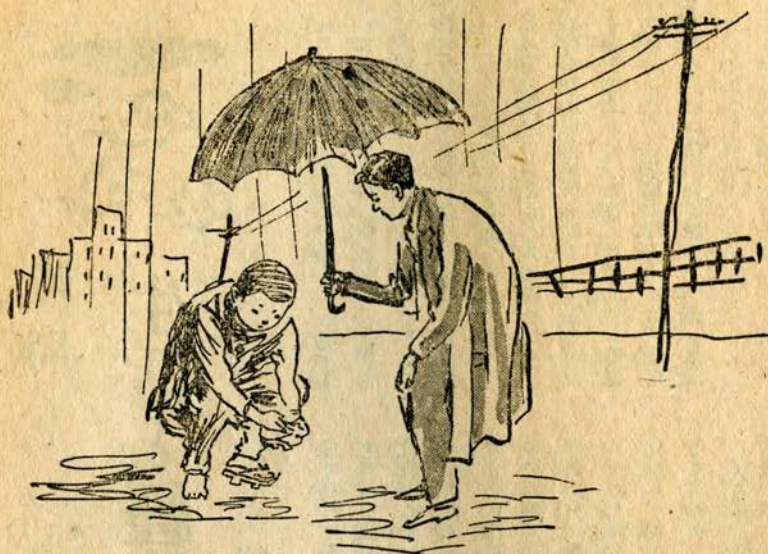
講話 一紙小消息講義

中村 辨康先生

本郷區東片町七八 橋本樂榮方

淨き友の會幹事

電話小石川四九七六番





時局下の 生活と經濟道

笠 森 傳 繁

此のごろ、こゝかしこで聞くことは、生活が窮屈になつたと言ふ聲である。しかし、少し方法を工夫し、考へ方を新にすると、不思議な位に、窮屈と思つた生活に、ゆつたりとした餘裕が生ずるから面白い。

私は毎日馬込の自宅から大森驛へ出て、東京驛を初め市内諸所へ往來してゐる。

事變後間もなく、東京、横濱間の二等電車は廢せられ、大森驛の乗客中には、急に三等車の混雑に生活の窮屈さを痛感した人が少なくなかつたらう。

この私も其の一人であつたことを忘れはせぬ。ところが、さうと決心し其の積りに

成り切つてしまつた此の頃では、元氣な學生さんや職工さんなど、揉まれ揉まれて満員電車に乗つても、これを苦とはせず、却つて青壯年の昔に若返り得た自分を見出しながら、海に有り難いと悦ぶ氣持になつたのである。

更に又、自宅から驛までの十町ほどを乗つてゐた乗合自動車も、間もなく運轉回數を減じ、朝の出發時刻には超満員となり、とても乗られさうもなくなつたので、餘儀なく片道は歩くことにした。さうすると、夕刻歸宅の時だけバスに乗るのが、とても愉快だつた。今まで何とも思はなかつた乗

合の有難さを今更に知ることが出來た。

然るに此の歸途のバスも、長蛇のやうに列を組んで待たねばならず、凡そ二十分位も待たねば乗車することが出來ぬやうになつた。

そこで遂には歸途も亦徒歩と決心した。

ところが一時は苦しみであつた此の徒歩が、今では一つの樂しみと思ふやうになつたのは不思議な位である。

雜沓のバスに乗つて、時間の豫定を目標苦茶にされるよりも、途中の花を見、緑を眺めつゝ、歌でも考へ乍ら、しかも時間を正確に往復出来ることの氣持好さ。特に往復二十町の徒歩の健康増進上に及ぼす効果の大なることを思ふとき、ほんたうに有難い。そして、十年の昔に劣らぬ健康状態を恢復し得たことが嬉しい。

回顧すれば最初この馬込の里へ轉居して來たのは、往復二十町の徒歩が一つの目的であつたのである。特別な運動をせぬとすれば、

時々一時地位を歩することは、保體上總算に必要だと思つたからである。

それなのにバスが通るやうになつてからは、つい何時の間にか、最初の目的を忘れただかのやうに、急ぐと言うてはバスに乗り、急がぬ時もこれに乗り、バス即ち足だと言ひやうになつた。謂はゞ文明病に罹つた體である。

故に此の時局下の交通難は、私の善足を奪つて實足を生かしてくれた名醫であつたと言ふべきであらう。私は此の頃この實足の有難さを痛感し、體康の若返りを感じしつゝ、眞の意味の自給自足の貴さを意識したやうな氣がする。

昭和農業恐慌の頃、私は其の打開策の一として自給自足經濟の復活を叫んだものである。

然るに考へて見ると、その頃から私の生活は足をバスに奪はれて、他給依存の状態に陥りつゝあつたのではないか。この自己

矛盾に反省の機會を與へたのがこんどの事である。

實にこの度の事變こそ都市居住者をして、都市人に相應する自給自足經濟道に生き返らしめたものと言つてよからう。適度の自給自足は農村人にも都市人にも必要でなく、身體の強健、精神の健全の爲にも實に缺くべからざることである。これは日本人の經濟道の一であり、時局下に於ける一經濟倫理であると思ふ。

時局下に於ける我れ等の生活は、こゝでも、かしこでも平時とは異つてゐる。衣食住の各方面に於いて多少とも非常時色の認められぬものゝないのは洵に當然のことである。バスや電車の問題のみならず、米穀、砂糖、油物、履物、家、娯等々種々様々の問題が其の解決を追つてゐる。この時に於いてこそ少欲知足なる金言の有難さを悟

り得よう。少欲知足と言つたからとて、これを消極的とのみ考へてはならぬ。消極を基本とする積極がその内に含められてゐる。

物資の不足を克服した人でなければ、物資の豊富を活用出来ない。少欲知足なればこそ、有れば有るやうに無ければ無いやうに、國難無難なる經濟道を行じ、自らは枯澁の生活に終始して、國富を増し、公益に盡し得るのである。富んでは富の虜とならず、貧にして清貧の勿體なさを味うことが出来る。

時局下の我れ等は、宜しく日常生活上の物資の異常をば、物的にも心的にも克服し、異常を平常化して苦を樂となし、工夫と感謝とを以て、凡ゆる事態に歡迎し、總てのものを活して用ゐることこそ至極肝要であらう。眞の經濟道は正にこゝに存すると信ずる。



筆 隨

郭公・三光鳥

吉 田 絃 二 郎

今年は四月の二十二日に郭公が鳴いた。去年より八日早い。五月の十八日にはじめて三光鳥が鳴いた。今朝もまた鳴いてゐる。

かつては郭公が鳴き、三光鳥が鳴くのを聞いては武蔵野に住む身の幸福を感じたものであつたが、孤獨の身になつてからは鳥の音を聴くのは耐へがたいことになつた。鳥の鳴かないところに住みたいと思ふこともある。

四年前臨終の妻の枕邊にかく庭の木に来ては鳴いてゐた三光鳥は今朝も亦わたくしの窓ちかく来て鳴いてゐる。

しかし考への持ち方一つである。郭公や三光鳥が鳴かなくなつたら、なほ一層淋しいことであらう。寂しさに居るものは寂しさを主とすので、自ら進んで寂しさの底に徹すべきであらう。初夏のころの郭公、三光鳥をはじめわたくしには割合に初夏

から仲夏にかけて忙びしい思ひ出が多い。

母の柩を送つて山の火葬場に行つたのは五月の夜であつた。山の空氣は重く冷たかつた。夕月夜の小徑には眞白な野苺の花が咲いてゐた。だから今でも野苺の花を見ると胸をしめつけられるやうな氣がする。

中學時代に一番親しかつた友人の工中尉が千葉の海岸の家で腹を切つて死んだ時、わたくしは稲毛の松山の中の旅館の庭に立つて紫陽花を眺めてゐた。わたくしは松山の旅館から砂丘のあたりを歩いて見た。まだそこには工が昨日歩いたまゝの下駄の痕がとりのこされてゐた。それ以来紫陽花を見ることに工を思ふやうになつた。

わたくしたちのあわただしい生活をめぐつて靜かに小鳥が鳴き、花が咲く。これあるがために睡りかけてゐた悲しみを掻き



立てられもするが、同時に悲しみも浄化される。

悲しみを逃げようとするのは愚なことである。悲しみあればこそ下機の身は深い智慧に近づき、俗念も浄化される。

×

また家のまはりに蛇が出て来る季節になった。蛇は時としては倉の窓を覗き、時としては織姫の硝子窓いつぱひに這ひ、或る時は庭の薔薇に絡みついてわれ／＼を驚かす。

火がけた／＼ましい吠え方をしてゐる時は必ず蛇と争つてゐるのである。

初夏はうれしいが蛇は苦手である。

このころ武蔵野を歩いてゐると子供たちが大さわぎをしてゐるのはたいてい小鳥の巢をねらふ青大将をめぐつてである。蛇も生きるためには小鳥の巢を襲はねばならぬであらうが、人間としては何としても小鳥の方に味方したくなる。

ウイリアム・ブレークの詩にも獅子と仔羊の話がうたはれてある。獅子は生きてゆくためには仔羊を襲はなければならぬ。

この世界にはいたしましきも仔羊の血が流される。神は地上の萬物を愛の手によつて育て上げる。しかもこのいたましい矛盾がある。

いかにしてこの矛盾は取り除かれるのか。

ウイリアム・ブレークに言はすれば、そのいたましい血の姿は地上界の假相に過ぎない仔羊は死の邪那天上に歸つて神の愛の手によつて抱かれてゐるといふのである。神は鳩をあはれむとともに獅子の飢をもあはれむといふのである。

ブレークの考へ方も或る程度まで同感できないこともないがしかし近代人には地上に溺された仔羊の血に對して眼をつむることはできない。地上の悲劇は何といつても悲劇である。人間的な苦悩である。

夏が来て、家のまはりに蛇が出て来るやうになると、いつも小鳥と蛇の因縁を考へさせられる。

×

このころ武蔵野を歩いてゐて薔薇の中で面白い話を聞いた。話は雀の子を襲はうとした青大将を憎んで、みんなが大さわぎをしたことから詩人村上佛山と蛇の話に移つて行つた。

或る日佛山は子供たちが蛇を捕へて殺さうとしてゐるのを見た。佛山は子供たちに乞ふて蛇を助けて自分の家に持つて來た。

佛山は蛇のために箱を探して蛇の巢を拵えてやつた。蛇はおとなしく佛山の家のベツトとなつてしまつた。



佛山が外出先から歸つて來ると、嬾は意旨を聞き分けて巢の中から門まで、お人を迎へに行くやうになつた。

或る夜佛山は家に歸つて來た。佛山は門を這入つた刹那何かちくちく足を噛んだものゝあることに氣付いた。

「畜生！ 嬾だなー」と思ふと、さすがに佛山も憤りを抑へることができなかつた。

かれ一撃の下に感知らでの嬾を叩き殺さうとした。しかし次の刹那佛山は考へ直した。

「嬾は門までわしを出迎へに來た。それを知らずにわしは踏みつけたのだ。嬾は本能的に人を噛まうとしたが、主人であることを考へて、止してしまつたのだ。たゞわづかに齒を軽くあてたのみである。」

佛山はそれでもなほ嬾を叱るだけは叱つた。

「早く巢に歸つて寝ろ。おれを噛むといふことがあるか。」この小言を聴くと嬾はいかにも悲しげに、しかもものろ／＼と巢に歸つて行つた。

佛山は一層のこと嬾を捨てようかとも思つた。しかし外に棄てゝしまへば、また人を噛むであらうし、ともかく今まで通り飼つてやることに決めて寝に就いた。

朝になつて佛山は家人たちの騒がしい聲に眼をさました。「旦那さま大變でございます。嬾が自殺をしています。」

「何ッ！ 嬾が自殺をした。」佛山は驚いて跳び起きて、嬾の巢のある方へ行つて見た。

成る程嬾は自分で自分のからだを噛んで死んでゐた。

x

耕地理理といふ名目で武藏野のあちこちと美しい自然が懷されてゆく。

それでも白鷺が葦の中にゐたり、鶴が鳴いたりするのは初夏のうれしい情景である。道路を切り拓くために崩された崖の下に、わづかにとりのこされた池があり、池には去年と同じやうに睡蓮の花が咲いてゐる。明日をも待たぬ人の命のあはれさを想はせる。

しばらく佇んではわたくしは睡蓮の花を見守つてゐた。

藤井實應編

法然上人法語抄

中里介山著

法然上人傳

菊半截一四四頁
總ルビ付

定價三十錢
送料六錢

(三六版二五〇頁クローズ装)

定價六十錢
送料六錢

本會發行

死後は何うなる？

(續)

淨き友の會座談會

中村師「さて、江角さんの御覽

聞は、人生を空に歸するもの、空々寂々となるものと見る處に却つて死後の安心が持たれるのではないか、といふことでした。それに對し、上來、私は佛敎の空の意味が異なることを述べ、空の體證の困難さを申したのです。今日の複雑な社會生活の網に緊縛されてゐる者として、それなら我々は、どう心得ていつたらよいか。他にとるべき方法、態度は無いかと尋ねるとき、淨土敎の念佛信仰の道が見出されると思ふ。

そもく南無は歸命で我が生命を擧げてドウゾと大生命たる念佛に任せた姿であるからそこに自づと無我を湛らすに値つた姿が現れて来る。而も理窟でなく、生活の事實の上に現れて來ねばならぬ。

我々のは花火みたいで一時的であり易い。念佛するときに花火の上つたときで、せぬ時には儼がくといふ心になつて了ふ。念佛に於て如来に任せた姿が、生活の上に現れねばならない。凡入報土が淨土敎の信仰の姿で凡夫たる我々が念佛の道に依て眞實の

世界に攝取される、その信仰が擴充されてゆく時、生活の上に空を體證してゆくことになる。

淨土門的に言へば、空は一閃のお蔭だと氣付くことである。丈夫の時分らぬ健康の有難さも病氣になると分る。苦難も亦たその如く興へられた恩寵と見る。逆境逆縁も亦た恩寵と感ずるやうにならねばならぬ。大いなるものの力にひかれゆく時我が足取りはたど／＼しく定かならぬも自づと大道を導かれゆくべきで、大生命の瀕に歸入する念佛の信仰に依て、全てに

とらはれず而も全てを天地の大生命のお蔭とし恩寵として把握してゆける心境になれるのである。縁起の上から、一切執着すべきものなしと見るのが空で、何も無いといふ虛無思想とは違ふのである。それを無執着といふ態度より一歩進んで一切をお蔭とみるのが空の淨土的理解と申せませう。

もとより色は因縁に依て又消滅する。然し現に事あり物あるではないか、物あり事ある處に又生活があるのではないか、といふ時、それを何と心得、何と眺めてゆくべきか。即ち、一切は天地の預り物と観ることである。我々の生命、我々の財産、すべて預り物故に尤も有様に生かす事を考へねばならぬ。聖如上人が廊下に落ちてた紙切一片をも佛法界の恵として頂いたといふ、その心境に事物の扱ひ

方があると思ふ。事物そのものは所謂我・我所で執すべきものではないが、しかし本來空なりと片附けずに、大切に扱つてゆく所に空即是色の考方があるのではなからうか。

こゝに淨土教的に觀た色即是空空即是色の姿がある。我は仲々とりざりがたい。それがとれぬ姿が無明であり迷であつて、とれた姿が明・悟・覺の現れた姿である。さすれば、我が力の頼むに由なきを知つて、阿彌陀はとけ我を救ひ給へと、歸命しゆく姿こそ、無明の打破されてゆく姿でなければならぬ。

一應理窟では空といつて生死の問題が解けたやうに思へるのかも知れぬが、單空觀では本當の安心は出来ない。死ねば皆空では、生誕の働きの仕事も無いことに

なり、人生何處に意義を見出すべきやになる。無量壽無量光なる阿彌陀佛に歸命しゆくとき、大生命の眞實の價値の世界に深入出来る心の安らかさを得ることが出来る。もとより宇宙の生命力の現れ

にも混濁した姿も價値に満ちた姿もあらう。我にとらはれ執着に纏縛されてゆく姿は迷より迷へと輪廻しゆく相である。死後も亦た迷へる生命の混濁せる相としてのみ發現しゆくことであらう。生命には亦たすぐれた清らかな價値に満ちた相もある。かゝるすぐれた生き方に生きることによつて、彼は大生命の進展のすぐれた部分の發現に参加してゆくことにならう。個

在としての彼は滅んでも大生命の斯るよき價値に充ちた進展相の中に推参し得ることであらう。恰かも肉體三勇士の死が、日本精神の

發現として永く皇軍精神の歴史の上に生きてゆくやうに。

法然上人が「露の身は此處彼處にて消えぬとも心は同じ花の臺ぞ」と歌はれたのも、つまりは、念佛の信仰に依て、生ける中も互に眞實の生命通に目覺めると共にたとへ生命は滅んでも阿彌陀佛のみに依て同一の眞實なる價値に充てる生命活躍の場に推参し得ることを信ぜられた故ではなからうか。魂の再會について前に述べたのもこの心であつた。

江角氏「空に徹した人が親しい者に死なれた時はどうするか。悲しみはない筈ではないか。」
中村師「我々は凡夫で人情を持つてゐる故悲しいのは當然である。或は空に徹した人は非人情にはなれるかと思ふ。しかし無人情、殘人情とは異なるであらう。もし非

人情が冷たい智だとすると温い心はない譯で、その點我々は寧ろ凡夫でよい、生活の上に瞬間的とはいへ菩提の世界に住し得る事を寧ろ幸福に思はねばならぬ。親鸞上人も婆娑の心はかはらねど心は淨土にすみ遊ぶと歌はれてゐます。よしんば聖道門の空に徹した姿も單に非人情といふ丈でなくやはりにそこには慈悲心が現れねばならぬと思ふ。多くは非人情といふと悲喜人情を超越した冷い心とり易いが、慈悲心に住する邊にせねばならぬと思ふ。たと我々凡夫の起す慈悲は有縁の慈悲に過ぎぬが、緣起觀に立つとき法緣の慈悲が生じ、佛に至つて始めて無緣の大慈悲に徹し得る。緣起空觀に立つとき既にあらゆる事物に對して慈悲心が生ずべきだが、佛の大慈悲に至つて初めて眞に空に徹せる

人情が冷たい智だとすると温い心はない譯で、その點我々は寧ろ凡夫でよい、生活の上に瞬間的とはいへ菩提の世界に住し得る事を寧ろ幸福に思はねばならぬ。親鸞上人も婆娑の心はかはらねど心は淨土にすみ遊ぶと歌はれてゐます。よしんば聖道門の空に徹した姿も單に非人情といふ丈でなくやはりにそこには慈悲心が現れねばならぬと思ふ。多くは非人情といふと悲喜人情を超越した冷い心とり易いが、慈悲心に住する邊にせねばならぬと思ふ。たと我々凡夫の起す慈悲は有縁の慈悲に過ぎぬが、緣起觀に立つとき法緣の慈悲が生じ、佛に至つて始めて無緣の大慈悲に徹し得る。緣起空觀に立つとき既にあらゆる事物に對して慈悲心が生ずべきだが、佛の大慈悲に至つて初めて眞に空に徹せる

ものと云へるので、我々としてはそこまでは考へずとも自分の心構へさへ把握すればよいのである。その場合悲しむ程の慈愛心はよいが悲しみに打負けひしがれてはならない。あきらめが必要である。

あきらめとは諦め、即ち眞理に明らかなる、諦観するといふことである。生残つたものとしての務めに勵む心がとり戻されねばならない。」

橋本女史「大抵はあきらめるとは思ひ切る、捨てて了ふ事に使つてゐる。」

中村師「そこは日本人であつさりあきらめちまふ譯ですね。」

佐々木氏「空に立てば一切空なのだから悲喜もなくなるのではないかと思ふ。」

中村師「そこで禮讃にも觀音菩薩大慈悲已得菩提捨不證といふ。

既に菩提を得るも捨てて證しない。空に徹してゐるが木佛金佛非人情になつて了はぬやう、慈悲に住するが故に一の無明を寢して證しないといふのでせう。」

瀧口氏「それで死んだ者に對しては回向をする、菩提を弔ふといふ心持を起すことになると思ひますが、念佛に依てその靈に手向けてゆけば、必ずその靈は成佛の姿をとると信じてよい譯ですね。」

中村師「聖道門から言へば戒定の行を修して佛作佛行してゆく所に成佛することも出来るのですが淨土門は徹を中心とし、念佛に依て佛と衆との融合が生ずると見る。かくて佛の心を知るときに身に適つた生き方を生きてゆかうとする。

佛心とは大慈悲なりと知る時にその大慈悲の眞分の一をも果さう

との心になる。阿彌陀佛に染むる心の色に出でば、と法然上人の詠まれたやうに、自然佛のみ心にそつてゆかうとする心持になり、その心から萬人の獲信を祈る心も生ずる。

自分の魂の救ひが出来たと、即ち如来様に任せ切つたとき絶對の安心が出来、生活の苦と不安とから免れ得る。そして道を求むる求心力強ければ又還心力も強い譯で、生きてる人には傳道となり、死んだ人に對しても成佛を祈る心持が起る。

それが所謂回向の心である。回向には十方世界に手向ける總回向と亡き一人に志す別回向とある。回向とはふり向けるの譯で如来の方へ向くやうにと念願する心である。或は直接の効果はないと思はれるかも知れぬが冥幽境を異

にするときとて何らかの影響はない筈はない。

自分の力でするのではなく如来様の力を仰いでする所に淨土教の回向があるので、私の方でなく如来の大きな力に依て成就出来る事を祈るのである。

至誠天に通じ鬼神を泣かしむるといふではないか。必ず我が願のとどく、ことを確信してどこまでも突進む誠意が是非欲しいもので、その誠意にあれば、きつとその心持は届くものである。生きてる人にも仲々自分の心は達しないものであるが、いつかは通じ得ると信じて進む外なくどこまでもそのやうに突進む場合には、又必ず何時の日には通ずるものである。それと同じで、飽迄み佛の力に頼つて、回向し参らせねばならない。」



筆 隨

入

學

佐 賀 一 海

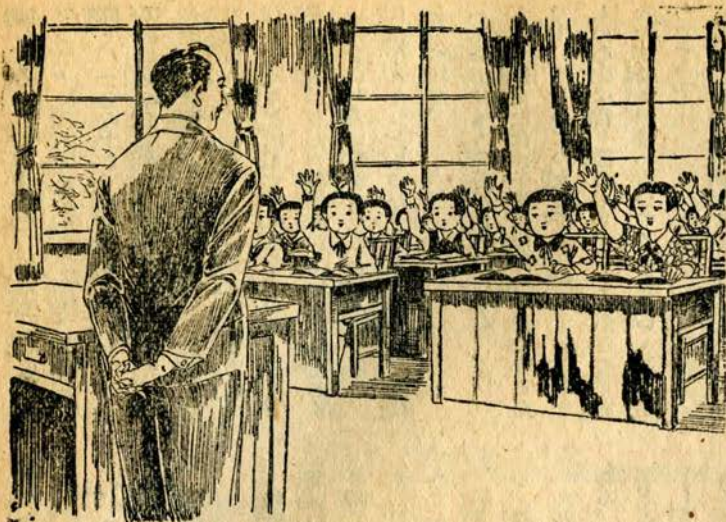
長女は七つの早生れで、今年の四月、小學校一年生になつた。新入日に附添つて行つた母親が戻つてから、「こんどの先生の教育方針はちがつてゐる、だつて兄達のときは一年二年三年は、はつた、かしがい」と云つてゐたのに、低年級こそ大切な時期だから、家庭でもうんと勉強の指導をして戴きたい、かう仰しやるんですもの、あたしもぼんやりしてゐられない。こんなむづかしいことを云つて興奮してゐた。その長女の隣に、「一ノ二、サガエシコ」と記された丸い名札がぶらさがつてゐる。「演子」などと讀みづらい漢字名をつけたので、きつと先生も困つたんだらうと、僕は少し悲觀しながら「一ノブコ」と書きかへた。

長女は男女混合の組に入つた。これも同じ組に入つた女の兒をもつ父兄の一人が「男組は困るなあ」と苦情を云つたら、「さうお思ひになるのが間違ひです」と先生はきつぱり答へたさうである。そして、低年級の兒童の場合、どうしても女子の囃は男子に劣る、それで却つて女生徒の自然の囃みが生じて來る、これが三年四年となるに従つて、他の女子ばかりの組より男女組の女生徒が頭角をあらはす結果となるのは経験から斷言できます、だから不平はないと思ひます、といふ意味のことを詳しく説明したさうである。

○ 長女は生まれてから病氣になつたことがな

い。それが入學少しまへから、へんに鬱りこんでぐづつてゐた。風邪だらうと思つてゐると、だんまりがひどくなつて來た。呼びかけても返事をしない。どこか癪いのか、とき、正してみたが頭を横に振るだけである。あまり聞詰めるとしくしく泣きだしてしまふ。

「この子は耳が遠いんですよ。あたしはまへからさう思つてゐたんです。耳の遠い原因が心臓なんです。母親は急に思ひ立つて、長女を醫者に連れて行つた。しかし診斷の結果は別にとり立ててゐるいところもない、と云はれて歸つて來た。學校がいやであんなふうにしてゐるのなら、年を擲するわけでもないから來年にするか。僕がさう云ひだすと、あなたは何を云ふのです、まるで他人の子みたいに？ 學校は好きなんです、去年から學校はまだかまだかつてせがんでゐたぢやありません。お友達を集めては學校ごつこばかりしてるぢやありませんか。それがわからないんですか？」母親は自分のことのやうにまくし立てた。



幸ひ、長女は二日目の朝から母親の附添ひは要らないと云つて、近所の新人生達と手を取

り合つて通學はじめた。同じ小學校に通ふ上の兄二人は、この妹に對してまるで無關心である、が、黙つてみてゐられないのが母親だつた。

三日目から一時間目の授業が中絶ですゝんでゐるくらの時隙を見計らつては赤ン坊を背中におんぶで授業見物に出かけて行つた。學校までは子供の足で五分とかゝらない。

長女は學校から戻つて來ると、母親のために机のまへに坐らせられた。そして讀本の練習と書き取をやらせられる。「イー」の縦線がまつすぐに引けないことや「コ」を裏返しにかいてしまふことで、長女は母親の醜いを伺ひながらそれをかく。母親は容赦なく同じ假名を十分も二十分も書直させる。これは困つたことになつた、と僕は思つた。

この子はどれもぼんやりしてゐる。先生はお行儀がよろしいと云ふけれど

やつぱりへんだ、先生が名を呼んでも返事をしないことがあるし、どうも耳が原因らしい……」母親はこんなことを繰返してから、ほんとに耳が遠いかどうかの實驗を茶の間でやりだした。

長女は意氣銷沈の様子で、離れのところで小聲で云ふ母親の言を復誦するのである。が、それは氣にかゝるほどの結果はもたらさなかつた。

「あんまり學校々々だと夢でうなされるぞ、それこそ子供の神經衰弱になつてしまふ。僕が云ふと、

「うなされるくらいでないと優等生になれません。」と母親はすまして答へた。

窓開放して授業する、それは運動場で上級生達が遊戲をしてゐても、それに生徒が氣をとられずに室内の授業に専心できるやうになる訓練の意からである、先生にかういふ話を聞かされたと云つて、母親は得意であつた。

ところが或日、母親は赤い顔をしながら學

校から歸つて来た。「あたしが先生に叱られちやつた。」と面目なさうに云つた。算術の時間、一から十までの記號をつけたカードを順次に机の上に並べる練習である。長女がそのカードを還り分けるのに手間どる仕草が見

てゐられなくなつて、つい長女の机まで出て行つて叱りとはして手傳ひをやつた、そこで先生が親ごさんの授業參觀はいゝが口出しはいけないと苦い顔をされたと言ふのである。僕はやれやれと思つた。すると母親は、言葉をつづけて、

「あたしはもう當分學校へは行かないけれど、大體あなたが子供に無關心すぎて困るんです。はじめての女の子の入學ですからあたしの心配は當り前なんです。これからは、あなたが時々學校へ行つてくれるといふと思ふんです。」

然し、母親が教室通ひを止めてから、氣のせるか長女の態度が、うちにゐるときも自由になつて来たやうに僕に思へた。母親の家庭勉強の指導は根かはらずつづいてゐるが、聊

れたせるか、長女はあまり消けなくなつて来た。僕は長女に訊いてみた。學校は面白いのか。「そりや面白いわ。先生やみんなと遊べるもの。」

僕は安心した。

○

或晴れた朝僕ははじめて小學校に行つた。教室の窓の中を廊下から覗いてみると、讀本の同じ箇所を生徒が順々に復讐してゐる。先生が質問を出す、小鳥の囀るやうな聲を揃へて一齊に右手が舉る。

終業のベルが鳴る。先生の命令で禮をする。椅子を机の下に押しやり、左右の列をきちんと作つて運動場に出る。なかなか見事である。長女は僕に氣づいたか、そとに出るとすぐこちらの方を振り返り、にやつと笑つた。

僕は學校の歸り途、ふと思ひついて、まへに長女を診てもらつた醫者のところに立寄つた。同じ町内の古い馴染で、實務は殆ど息子がやつてゐる氣樂な身上の老醫だつた。僕は若敵であつた。

「あゝお嬢さんのことは心配ないですよ。取が遠いつて奥さんが氣にしてみましたが大丈夫ですよ。」

奥さんの氣休めに耳に栓をしたんですが、立派な健康兒ですよ。」

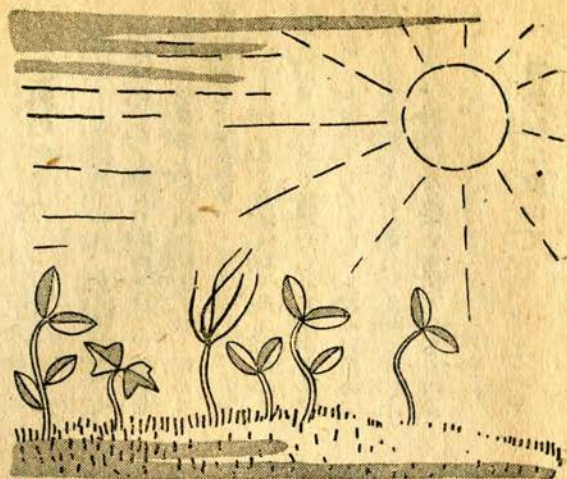
「つまり學校へあがるんだといふことで、子供ながら緊張する、その度が強くなると却つて平常の動作が鈍くなるやうに見えて来る、學校々々でほかんとしてしまふんですね。」

「えゝ、子供に刺激は禁物ですよ。緊張するつて云ふのは、責任感をもつわけです。小學校入學が子供の出會ふ最初の責任負擔です、大人の考へるよりもつと深刻なものでせう。」
老醫はかう云つて、基礎を取りに行つた。家庭の教育とは、——僕はもつと何かしやべりたい誘惑を感じたが止めることにした。

○

——入學してひと月半、僕の長女はすつかり元氣を取戻したやうだ。

(福田 勇畫)



趣味の話

大輪朝顔の栽培法

東京朝顔大輪
會理事審査員 井上貞雄

と共にその栽培が益々盛んになり、今日の隆盛を見るに至つたのであります。

大輪朝顔の栽培法には種々の方法があります。即ち行燈作り、破風作り、切込作り等は代表的なもので、其の各々に依つて栽培法も相違がありますので、こゝには総合的な美を目的とする盆栽切込作りにつき栽培法を簡単に上げたいと存じます。

培養土の作り方

腐葉土 (5)

腐葉土 (2)

田土 (3) (大豆粒程にしたもの)

あちこちに咲き出で、露の乾ぬ間の命ながらも寢覺めの氣分を喜ばせ、日中は萎れ勝の葉も夕方頃から掛け水の情に更生のさわやかさを示して夕宵の風情を感じしめて呉れる。

斯様な事が我が國民の好みに叶つたものと見て、之を住家近くに栽培して藥用以外に觀賞せられ、朝の目醒めを喜ばす爲に美しい姿を調へて、人待ち顔な様子が誰いふとなく之を「朝顔」と呼ぶ様になつたものと思はれます。

かくして種々の色彩の變化や種類の増加を來し、愈々珍重され徳川時代の太平の打撃く

大輪朝顔は現今では全國に亘つて培養される様になり、日本の代表花の一つとして世界の人々にも認められる様になりました。

朝顔も古い歴史を有する一種の藥草でありました。牽牛子と云つて支那から我國に輸入せられ、是れが我國の風土に適合し、眞夏の蒸し暑い氣分の時に朝露を受けて早朝垣根の

古土 (3) (前年使用のものにて可)
川砂 (3) (ミジン粒を除いたもの)
炭灰 (1)

以上を混合したものが結構であります。肥料は特に混入せず、炭、腐葉土等堆肥の際に米糠等少量を用ひたものなれば最も理想的であります。

肥料の作り方

乾燥肥——茶種油餅一升、魚糞五合、土五合を混合し良く攪らし籠に入れて、醗酵せしめ、再三繰返し約三四週間後乾燥し細かにして貯蔵して置きます。

水肥——水一斗に茶種油餅一升五合を入れ、瓶か壺などに貯へて腐敗せしめて置きます。そして一ヶ月以上したもの、上澄みを薄めて用ひるので、澆てかき廻して使用してはなりません。器物はなるべく密閉し得るもののが良いのです。

栽培鉢に就いて

鉢は口徑五寸以上六寸以下のものであれば、培養上からも適當です。乾燥の烈しい瓦鉢でなければ良く、青磁形黒釉掛け鉢なれば咲いた花とつり合ひ品位があります。

培養場に就て

培養場では、都合では屋根の物干場で結構です。なるべく日光の良く當る東南の空いて居る場所を御選下さい。庭で作る場合は三尺以上の棚が良く、鉢と鉢はあまり接近せしめず相當の間隔を取る事が必要です。

種子の選定

大輪朝顔を栽培するには第一に種子の選定が大切であります。いくら骨を折つても種子が悪くては大輪は咲きません。

巨大輪性のものはすべて花弁の六瓣以上七八瓣のものでなければなりません。現今改良新種たる蟬葉朝顔が良いと思ひます。ことに黃蟬葉系のは花の彩美と色調に品位があります。

播種に就て

播種時期——五月三日頃(八十八夜)より同十五日頃迄の天候良好の日に播きます。播種土——成るべく無肥料の床土五川砂の



細かいものを五を混合したものを水蜜桃の籠程の物に入れ三四分の深さに種子を俯向けて下種します。播種後は充分灌水し日陽りに出し土を乾かぬ様にして置きますと約一週間で發芽します。

移植に就て

甲朝葉が展開したなら早速根をいため様

に栽培鉢に本植します。發芽後四、五日もそのまゝにして置く事は良くありません。移植の際の土は培養土を用ひます。鉢の穴は瓦見發等で塞ぎ下部には荒目の土を入れ、上は所定の土で植付けます。成る可く密く植えた方がよいのです。

土は指などで締め付けず、ゆすり込み如露で水を施して上面に水を敷き、一日日陰に置き翌日より日光に當て、毎日水の乾ぬ適度の灌水をします。

それから約二十日間が大輪朝顔栽培の基礎的な大事な時代であります。既に本植後盛々と一人倍水々と勢付いた苗にしたのが、人情であります。それは朝顔培養上の最大の過誤であります。既に水太りした苗にする事は良くありません。移植後肥料を用ゆれば太く葉が大きくなるが、然し花の大きさは相伴はぬものであります。

特別な肥料はこの時代には與へず、自然的な發育に於て草を締め根の發育に専念するのです。但し双葉の間から本葉が二枚程出た時

十五倍位に薄めた水肥を二回程施用します。水はなるべく汲み置きの暖かいものがよく双葉の付根から出て来る左右二つの芽は見付かり次第掻き取つてやります。

摘芯と埋肥

双葉以外の本葉七八葉出た時、それ迄伸びたものを下葉三枚残して切り込みます。双葉の外に、そして残した三枚の葉の腋の三本の芽の中一番上の芽一つを取り捨て相鄰の二芽を大切に保護します。

これも雨天の日を除き、天氣の良い日に行ひ、摘芯と同時に鉢の兩側へ指で土をへこまし用意の乾燥肥料を（スプーンに軽く二杯）置き込んでやります。

蕾の定め方

かうして左右一本宛の蕾を育てますと、その各々の蕾に葉を生じ、葉の腋間より又芽を出し、それが第一葉第二葉の腋は芽で、第三葉腋より蕾を生じるのが普通です。

蕾は左右の葉は三個づゝ付け、葉先に葉を一葉付けて止めます。蕾が確定より葉先の方に付き鉢の外で咲く様なのは、元葉の芽一本残して切更えます。斯様に切り込んだものは十中八九送所望の個所に蕾を求める事が出来ます。

この間にはなるべく自然の發育にまかし無理に肥大せしめぬ様に注意を要します。

蕾の來着を良くするには水分の飽食が大の禁物であります。（蕾の定め方略圖参照）

整姿と灌水

蕾を定め蔓止めをしたなら、所定の蕾の發育に専念するばかりです。その頃は草の發育も旺盛、天候も連暑の時期で土の乾きがはげしくなりますから、灌水に油斷が出来ません。一度萎れたり水切を致しますと、花の裂傷が出来たりいたします。而し必要以上の灌水も葉を大きくしたり容姿を亂したりする原因となります。

水肥使用の時期

蔓止めをし蔓を決定し蔓が葉間に生長し蔓の葉が一二分になった時（開花約十五日前）が栽培期間中最も重大な時で埋肥も充分にきいて居り、蔓の生育にも、機械的に全力が注

がれて居る時です。その生育も補給すべく水肥を施用するのであります。

この時より毎日最後の灌水代りに水肥十二、三倍位にしたものを晴雨にかゝらず、約十日間程與へます。埋込肥は草育の基本肥であり、水肥は花に對する速効肥であります。



而し水肥は雨天でないかぎりなるべく濃いものを選びねばなりません。

活氣付いた草の發育と、蔓の生長が合致した時に、花は巨大化されるので、これが培養法の要諦であります。

開花前の處置

これまで適用して來た水肥は、開花五日前に中止し開花迄は水ばかりで育てるのです。

開花の前日迄水肥を施行しますと、花莖が凝つて巨大輪としての伸びがでません。そして此れまで比較的飽食せしめなかつた水分を開花二日前より充分あたえ、出來るだけ日光に當て、開花の能率を更に充分ならしめる様留意します。然し開花前夜は土に餘り濕氣のない方が花の伸びが良く、水がもたれてゐますと花が垂下したり、又そり返つて花筋が緊張つて充分な伸びを來しません。

理想的の培養場は、理想的の開花場所と云へぬ場合があります。特に關東地方では關西地方と違つて、日中と夜分の温度の差が大で

空氣が絶えず動いてゐる爲、花の伸長に非常な影響を致して居ります。

故に葉朝咲く花は、夜露の充分降りる風のあたため所で咲かさねばなりません。そして鉢と鉢とは密着群集せしめ、蕾の水分や葉面水分の發散を防止する事が巨大輪を得る要法であります。

開花後の處置

開花當日は午前十一時頃迄を限度として花を蔓の下より切り取り充分日光に當てる爲、培養場に戻します。一時、二時頃迄も室内に置きますと次の開花にさわります。そして次の蔓の生長にかゝります。既に前通り水肥の運用をし、草勢も頂點を過ぎて居りますから、埋肥をして補強致します。この間色々の場所から不用の芽が毎日出ますから、見付け次第摘み取り、無駄な芽、蔓等を成長せしめぬ様にし、所定の蕾の生育に全力を集中するのです。又蕾の腋から出る芽も取り去る事です。

理想の姿體

蔓の切込様と鉢の入れ方芽の立て様によつて、蔓が鉢の外にこぼれ出さぬ様にするので、枝は双様に仕立て葉も込ます。花は鉢の中で咲くのが最も理想の姿體であります、ですから、蔓の先の方に付いた蕾は、理想の姿體に於て開花さす事は出来ません。それですから一鉢で觀賞し得る輪數は前後十二輪位で、せいゝ八月十日頃迄です。種木にするにも八月中旬頃から蔓をのばさぬと良い種子を得る事が出来にくくなります。

大輪朝顔栽培日表

五月十日	播種す、
五月十六日	土の割れ見ゆ、
五月十八日	大分發生す、
五月十九日	本植をす、
五月二十日	水苔を敷く、
五月二十五日	本葉發生す、
六月三日	水肥十五倍液を施與(午後

三時半)

同上

同上(本葉三枚出る)

双葉腋の無駄芽を取る、

除蟲、

乾燥肥料施與、本蔓摘み去る、

行ふ、

第三葉の芽を掻く、

蔓更え(第二番蔓として二芽發す)

水肥十五倍のものを施與、

同上、

同上、

蔓先を止める、

十一日より三十日迄 無駄芽除去、

稀薄水肥施與、

初花(切り更え蔓のもの)

これは大體の標準で、各自の地方培養場等

により、又天候に最も大きく支配せられ一、

二日の長短は任意手加減が必要です。

以上大略愚見を申し述べました。皆様の御

參考の一助にもなれば幸甚に存じます。

待望の書!

『浄土宗讀本』成る

浄土宗教學部長 江藤 澂英

「爰に紀元二千六百年を迎へたわれわれは、皇土に生を享けた喜びに感激を新たにすると共に、更にわが光輝ある念佛護國の傳統に顧みて、愈々平生念佛の心行を勵み、よく自ら信じ、よく人をして信せしめ、以て、皇恩の萬一に應へ奉らんことを誓はねばならぬ」とは本書の巻頭を飾る郁芳大僧正猊下の序文の一節である。寔に曠古の盛儀たる紀元二千六百年の聖辰に値ひ、しかも興亜の大業を成就せねばならぬ秋に際して、大乘相應國たる日本佛教の精華として、念佛護國の傳統を誇る一千萬の全浄土宗徒は、究竟大乘の正信に住し、平生念佛の心行を策勵して、奉公爲宗の光榮ある責めを完ふすべきである。法然上人鑽仰會は専らこの趣旨と目的に向つて、月刊浄土誌の發行に、單行本の刊行にと、宗義の發揚と念佛の宣傳に、あらゆる苦難と闘ひつゝも、聖業に精進し來れること多年、而して久しい間の待望であつた「浄土宗讀本」が、今茲榮えある紀元二千六百年の聖辰に、しかも本月五日浄土一宗を擧げての祝聖大法要が總本山知恩院に於て虔修せられた日に、新裝成つて宗祖上人の室前に献本せられ、世に公にせられたこと

編輯部だより

大島大僧正から

お褒めのお言葉

◇讀者は勿論、編輯部でもしびれを切らして待ちにまつた浄土宗讀本がやつと出來上つて、一同はつと一息ついてから二三日事務、編輯ごつちやで發送に忙殺されてゐるところへ突然御來社下さつたのが、齋上寺法主大島徹水大僧正台ト、
「浄土宗讀本は仲々よく出來た。是非みんなに讀んで貰はにやらん本だ。わしも大いに宣傳して上げやう」
とにこ／＼齋の御激勵に一同大いに感激した。

大口注文殺到

◇京都で五月四日に嚴修された紀元二千六百年紀念大法要、續いて奈良の浄土宗全國教化大會で「浄土宗讀本」を始め本會發

とは意義深きことたると共に、感激の禁じ得ざるものがある。

本書は歴史、教義實踐の三編に分たれ、各編下章を分つて菊版四四〇頁に亘り懇説明示してある。本書は大野、中村、前田の三師の共著になるもので、その内容に就ては今更に贅言を要せぬ。三師が各自の蘊蓄を傾けて正法顯揚、扶宗護國の赤誠を披瀝されてゐる。殊に平明な解説と、行文の流麗は讀者をして巻を掩はざらしめるであらう。

装禎も總クロース金文字で、時局柄には珍らしい上本である。

私は本書の刊行に依て、淨土の法門が愈々興隆し、念佛の信仰が益々普及せられて、眞に淨土宗の傳統である念佛護國の實が揚り、正法と共にある日本國の無窮の興隆を希念して止まぬ者である。本書の刊行を衷心慶賀し、廣く江湖にこれを推奨する所以である。

(昭和一五、五、二〇)

淨土宗 長 郁芳隨圓貌下序

金戒光明 寺法主 望月信亭台下 題書

大野 法道
中村 辨康
前田 聽瑞
共著

法然上人鑽仰會發行

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八二

菊版四五〇頁・總クロ
イス裝本文五號バラル
ビ付挿繪十數個入り
定價 二圓五十錢
(本會の會員に限り特に一割引の
二圓十五錢にてお領致します)
送料(書留) 二十二錢

行の諸本を出張販賣したが、持つて行つた淨土宗讀本は全部賣切れ、他に多數の注文をとつて、意氣揚々と雇上げた。

向大本山知恩院で數百部のお買上げがあつた他にその他の大本山、寺院、諸學校等からも續々多部數の御注文に接してゐる。在家の篤信家石井通德氏はお一人で十部を御購入下さる等、本部は發途に大當である。

堂々たる外觀内容

淨土宗讀本の計畫が本誌に發表されてから讀者からの問合せが澤山來たが、計畫は豫定通りに進まず、執筆者も發行者も慎重に慎重を期し、校正などは印刷屋の方でとつて悲鳴を擧げる程念入りにやつたために意外の遅延を見、新刊の廣告を出してからやつと一月半で發行されたと云ふ始末、注文は殺到するし、讀者からはやんやと云ふ御督促でやゝ實感が先ばしつたと云ふ形で本部でも氣が氣でなかつたが、見事に出來上つた讀本を見てやつと一息。

トコ来船

思ひ

出せない顔

代衣
亜和

どうも見覚えのある顔なんだが、いつたい何處で會つた奴なんだらう。ネッド・プリングリイは自動車走らせながら、何處も首をひねつてみたが、どうも思ひ出せなかつた。

その男は、妙な顔付をしてガラス越しにネッドを見詰めるが、箱の中で死んで行つた。

ネッド・プリングリイは發明家なのだ。彼は、死刑囚が電氣椅子に腰かけさせられたり、絞られにされたりする話を聞かたに頸筋の邊

りをぶるるツと繰返させながら、「何とかならんものかなア!」と思ふのだつた。どんな慘酷い罪を犯した人間にせよ、今までのやうな道方はあんまり野蠻すぎると考へた。どうせ死刑にしないアならぬ人間なら、もつといふ方法で極樂成佛させたいものだと思つた。そこで彼は大きな箱の中に死刑囚を入れて、外部から瓦斯を注入して樂に死なせる方法を發明しようとした。

ネッドは、先づ小さな死刑箱を作つて、犬を入れては驗してみた。彼が十八匹めの野良犬を實驗したとき、はじめて「これなら!」と思ふものが出来上つた。彼は早速、ある州の司法部へ持つて行つて説明してみたのだが、すつかり氣狂ひ扱ひをされて頭追つ拂はれてしまつた。それでもネッドは根氣よく州から州へと、その發明品を持ち廻つてまづ囚人の極樂成佛を説いて歩いた揚句、やつこのことで或る州で採用され、ネッド式死刑箱のプランを實施させることに成功したのだつた。そして、今日その最初の死刑が執行され、

成績は頗る上々だつた。

その不幸な男が、前記に大きなガラスを破め込んだ問題の死罪箱の中に入れられた時、死罪執行立會人の間に混じつてゐたネッドはどうもよく見かけた男だと思つて喫驚した。

「俺はあいつを知つてゐる。だが、一體誰だつたらう。どこで會つた男だらう？」

箱の中へさし込んだ青白い電氣の光線で、ガラス越しにその男を見ると、男は何んだか奇妙な顔をして、とがつかぬ眼つきでさも何か探るやうにネッドを穴のあくほど見つめた。

男は箱の中で何か叫んだやうだつたが、もちろんその聲が聴えるはずはない。その時瓦斯が突然注がれ男は、發明者ネッドが期待してゐたやうに樂に死んで行つた。

刑務所からの歸途、ネッドの自動車は寂しい夜の山道をホテルへ向けて疾走つてゐた。ヒューツと山嵐が耳にあたつて、幌形車の中は震へるほど寒い。ネッドはいつまでもさつきの男の顔付が變に氣になつて、寒さも忘れる程だつた。

先刻、刑務所で死罪囚の記録を見せてもらつたが、ダン・スミスといふ恐らく變名らしい名前を知つただけで、その男の経歴を讀んでも、てんで當もつかない人間だつた。たゞ右の眼尻の傍にヘンなジグザクの禿げ痕があつたのが、不思議とはつきり想ひ出せるのだ。

「同じ學校だつたかな。それとも、軍隊で一緒だつたか知らん。違ふ、違ふ、そんな所じゃないぞ！ ちエツぢれつたい。一體どこで會つた男だつたらう。」

間もなく、自動車は夜目にもはつきりと白い雪を載せた峰と峰との間の山村に通りかかつた。ネッドの手は、夜の凍るやうなひどい寒さが手袋を通してビリビリと痛むほどだつた。ふと、ネッドは小さなランチ・スタンドを見つけたので自動車を止めて店に這入つた。

店には客がゐないと思へて、女がボカソとしてゐたが、ネッドの顔を見ると女は「おやッ」と言ふやうな顔付をしたと思ふと、ぼう

と頬を紅潮らめて、つかつかとネッドの側へ寄つて來たが、突然たちどまつて、

「あーら」と失望したらしかつた。

ネッドはおかしな女だなと思ひながら、腰を下すと、女は水とメニユウを持つて來た。「カフェが欲しいな、それから、あそこにあるバイにクリームをかけたのを呉れないか」

と彼は早口に言つて女を見た。女は注文のものを持つて來ると、不思議さうにネッドの顔をしげ／＼と見ながら勘定を受取つた。やがて女はコーヒー皿を洗ひ初めたが、獨言のやうに、

「外はお寒いでせうね」と言つた。

「うむ」ネッドはさう言ひながら、フォークでバイにくつと力を入れたが、指がかじかんでゐたので上手く切れない。ちれつたくなつてギユツとフォークを握らうとしたが、直ぐ指が開いてしまつた。

「まあ、お氣の毒に、すつかりお手が凍つちまつてますわ。こちらへゐらつしやい。溫暖

ませう」

女は大仰にこう言つてさつさと洗場の方へ歩いて行つた。

「まあいゝんだよ」

ネツドはさう言つて兩手をこすり合はせはじめたが、女は無理にひつぱつて行つた。ネツドは面倒臭く思つたが、女が馬鹿に親切なので、言ひなりに女の後について洗場に行くと、女は金盥に微温湯をいっぱい入れて、「お手をお入れなさいな」

とネツドの手を引つぱつた。ネツドは微温湯の中にちつと兩手をつけてみると、女はさつぱりとした小綺麗なタオルを持つて来て、彼の手を拭くと、軟かい手でネツドの兩手を揉みはじめた。

ネツドは女が餘り親切なのに何だか變な感情に煽られて、女をちつと見なほした。艶々とした銀髪、しかも黒い瞳、オリヅ色の頬、一寸眼に立つ深い笑窪のラテン型の朗かさうな女である。

「さあ、すみしましたわ、どう？」

女は笑つて手を放した。

「どうも有難う」ネツドはボウとしてやつとこれ返事すると元の椅子に腰を下ろした。女もまた皿を洗ひはじめた。ネツドは皿を洗つてゐる女の手に妙に引きつけられながら、フオークをパイにあてた。

扉が開いて男が這入つて来た。女はハツとしたやうに皿から手を放してその男をみたが、すぐがっかりしたらしく顔をくもらせた。その男は女の待つてゐる相手ではなかつたらしい。女は煙草の包みを男に手渡すと、又皿を洗ひ初めた。男は出て行つた。男の足音が消えると女は

「實をいふと」とネツドを見て口をきつた。

「あなたで一寸思ひ出しちやつたんですの」と言つて笑つた。

「男のお友達？」

「ええ、その人、いつもすぐ歸つちまふの上」一寸と淋しさに女は扉の方に眼をやつた。

「扉が開くと、あのめちゃなかしらつて

思ふけど」さう言ひながら「フランク・コリンさま」とそう呟いた。

「こりやどうも御馳走さま、でもコーリン様とかぢやなくてお氣の毒様に……」

ネツドがからかひ半分かう言ふ、女は一寸顔を紅くしたが、

「多分、ほかにいゝ娘でもあるんでしょ。でもそんなことどうでもいいのよ。あたし、あの人、チキンやビーフを食ふながら、

店に腰かけてゐる間が、たまらなくうれしいの。でも、あのひとつたらしいつも黙つて口ひとつ利かないで歸つちまふのよ」

ネツドは大變なところによつたもので、と、そろ／＼腰を上げやうと思つたが、女が餘りしんみり話をつづけるので、何だか氣の毒に思つて腰をおちつけた。

「でも、あの人がいつかは奥さんやお子さんを

つれて来るんぢやないかしら、でもいいの……今度こそあの人一人であつたら……」

ネツドは、この女をこんなに思ひ詰めさせてゐる男が羨ましく思つたが、その男に自分

が似てゐるとでも思ふらしい女の口吻で何だか自分までが變な氣になるのを隠へられぬ氣分になるのだつた。だが、裏腹は●ネット

「ええ、本當！ お出になつた時おやつと思つたわ。でもあの人には……」
と言ふをきき、女は自分の衣の裏腹を握らし

のよ」
とジグザクの妙な模様の禿げかたを、器用な手つきで書いてみせた。

ブリックリイはかう言ふが、面は至極不得手な諷刺な方なので、どうしようにも上手なきつかけも見つけ出せさうもない。

彼は諷刺作つてやをら蹠を上げた。女はネットを扉の端まで送りながら、

「あたし、どうしてこんなことをお謀舌したのかしら、不思議ですの、多分あなたが……」
と言ひかけた女の言葉尻をとつてネットが

「多分、僕がきみの好きなどひとに似てゐたから……と言ふんですね」と言ふと女は、

で、
「こゝんところに、こんな變な禿げあとがある



ネットは頭から水をかけられたやうに、ヒヤッとして、パツと扉の外へ駈け出して、自動車に乗ると超スピードで自動車を走らせた。

チャック・ステイン
ソン作
(齋藤清量)

小話募集

小話又は笑話を募集いたします。一話を七十字以内とし、内容は隨意です。掲載のものには薄謝を呈します。送り先は「淨土」編輯部應募係宛のこと。(編輯部)

〇…富士山麓御殿場の

念佛修養會略記

深い追憶となる…〇

元は東海道の本線であつた此の線が、丹那トンネルが出来てから御殿場線と云はれる支線になつたものの、陸軍の演習地であり靈峰富士の登山口である此處御殿場驛は、夏以外でもバスや自動車、便が多く、富士五湖は勿論のこと箱根の各温泉地にも吉田口や沼津方面にも通じて居て、交通は田舎の小驛には似合ないほど極めて便利である。

由來御殿場地帯は海拔千五百尺以上で空氣は澄澄であり、美蓉の

磁の靈氣に依つて我が國でも長壽者の多い土地と云はれ、その東山附近には外人や名士紳商の別荘が軒を並べ、冬を除いては春秋共に静養するに極めて好適の地である。

會場たる大乘寺は須走街道の中央部にある名刹で、時宛かも四百年の樹齡を保つ赤い一重の枝垂櫻と、うすい櫻色のあざやかな吉野櫻とが満開で、がっちりした鐘樓を背景に、恰度道成寺の芝居の書割を見るやうに、さながら繪に書

いた美しさである。しかも扶桑第一の靈峯は入葉の蓮華曼陀羅を目の前に大寫しに展開して、鶯を眺め色々の鳥の聲、蛙の聲、龍の音などが謂ゆる「百千種の樂を俱になす」が如くであり、その上清冽な水の流れ、池水に浮ぶ眞鯢、鰻の群、野山に咲く黄色な菜の花、白いこぶしの花、紫の菫の花、赤い桐の花などが今を盛りと咲き競れて居る有様は何に譬へんやうもない長閑な優雅な風光である。

原田美氏の如きは

「まるで淨土にでも來たやうで夢のやうな氣さへする。こんないいところへ來てお念佛させて頂くとは夢にも思はなかつた。何と云ふ不思議な因縁であらう」

と繰り返へしく感嘆の聲を放たれたくらゐである。

集つた者は、濱松の小塚伊三郎氏、静岡の瀧口吉之助氏、東京王子の原田美之助氏、大森の原田筆子夫人、鎌町の石川巳之助氏、松郷の瀧本史氏、小石川の鳴海要吉氏、荏原の江角金市氏、御殿場の池田夫人、道場主の神谷氏の十人あまりで誠に小人數ではあつたけれども、シンミリとした誠によい集りであつた。

時間割は五時に起床して洗面掃除、六時念佛、七時朝食、八時から十二時まで念佛と講話、十二時

に中食、一時から五時まで念佛と講話、五時から六時まで入浴と夕食、七時の念佛、八時半の座談、九時半の就眠と云つた順序で、時には十一時までも座談に花の榮へる事もあつた。

講話の内容は主としては淨土の教義で、特に人間本來の理想と念佛との關係に就いて力説した。前後九回であつた。

原田美之助氏は念佛中何時も涙を流して喜んで居られ、原田筆子夫人も亦た講話中涙々涙に暮れて居られた。廿一日の午後は其晩歸する人もあつたので、念佛の時間を割いて特に座談會を催した。其の席上、瀧口氏江角氏は最も眞誠に急所を衝いた質問を續出され、非常に参考になつたが、それらの質問は一般の求道者や若い青年僧侶の方々にも聞いて貰いたいことは

かりであつた。

また石川巳之助氏は獨り早く起きて念佛し乍ら靈氣靈光の中を逍遙され、繰返へし法悦法喜の眞情を吐露され心から喜んで居られたのは誠に尊く思はれた。

江角氏鳴海氏は忙がしいおつとめのある中をわざ／＼時間を割いて参加されたのであるが、その熱心の態度には自から頭の下がるのを禁じ得なかつた。別けても瀧松の小塚氏は廿二日にお孫さんの婚禮があると云ふのにその忙がしい十七、八、九の瀧三日間を参加されたことは特筆に値ひするものがある。

またさすがに發起された瀧口氏は何から何まで細大洩らさず心をくばられ、町中へのポスターを初めとし、毎夜の座談會には果物や御菓子や、三度の食物の材料まで

御持参下すつたのは、涙ぐましいまでにその眞情至れり盡せりと云ふべく、一同増しくその御親切に感激しないものではなかつた。

また瀧本女史は御寺への心付などに篤志を寄せられ、わざ／＼おいしい立派な御菓子や果物野菜類なども御持参下された。臺所の方々も皆よい人ばかりであつた。

御住職の神谷氏は陸軍少尉で軍人会や青年學校などにも關係せられ、中々お忙しいやうであつたが、此の地方の郷土研究に興味を持たれ、本尊の善光寺如來のゆはれや大乘寺の縁由や、仁杉と云ふこの村落の名に就いての傳説などを話して下された。

かくの如く會する者も處の人も皆なよい人ばかりで、誠に「證上人俱依一處」の感が深かつたのは非常に嬉しかつた。

始めの講話では名古屋からも靜岡縣の焼津からも茨城縣の取手からも参加して下さる方々がある豫定であり、東京からも土肥氏吉田氏澤夫人其他も見えたと云ふ語で少くとも二十人以上にはなる筈であつたが、色々都合がつかなくなつたので見えられず、いさゝか淋しい氣持がしないでもなかつたけれども然し少いだけに海にシンミリと能く打ちとけた文字通りの同儕同行の氣持のするよい集りであつたことは、終生忘れることのない深い追憶となるであらう。何事も因縁である。多勢だと其の因縁を味ふ深さは深いけれども、少なければ少ない程一層より深く其の不思議な因縁を味ふことが出来る。凡ては如來様のお覺召しである。唯如來様の御覺召を有り難く頂いて行けばよいと思ふ。

信仰實話

念佛申さぬ

効果が出ない

月影寮と片山さん

初夏の燦々たる陽を浴びて道行く若い娘は

ちはセルの蕭々の下にシットリと汗ばんでゐる、伸び切った若芽はすでに充分の活動を開始してゐる。犬までが忙しさに、往來のアチコチを駆けづり廻つてゐる。

市電の騒音をうしろに聞きながら、傳通院を左に曲り、更に右に折れば月影寮の扉に出る。月影寮は椎尾舞匡先生の指導によつて經營され、いま四十數名の娘さんたちが毎日月影寮から各種の専門學校に通學してゐる。

まさに初夏のシンボルのやうな若い人達ばかりが寄附してゐる月影寮は、はち切れるやうな元氣さをもつてゐるが、その酸刺さる内にかくして、飽くまでも淑やかに、人格の陶冶

に、そして勉學に努力してゐる。

月影寮の若い娘さん達の毎日の生活は決して理屈や規則では達し得られないものを持つてゐるがこれは即ちお念佛が生活の規範となつて、その信仰の力によつて和合し、協力してゐるからだらう。この毎日を直接指導してゐる人に片山柳代さんがある。

片山さんはここで娘さん達の指導に依じてすでに八年になるが、この間二百數十名の入達を送り出してゐる。學校によつて修業年數が違ふので、一ヶ年修了の學校を卒へたものは一年間しかゐないわけだが、長いものになると實に六年間もここで日夜の薫陶を受けて歸るし、中には學校を卒えてからもしばらく

寮に歸らず、寮のお手傳ひをする人もある。

月影寮での信條は、先づ總てのものに對して、これを拜むといふことを以て爲すといふことである。そして次に、良い日本國民になるといふ氣持を中心にして努力することである。だから食事をするにしても必ず食作法を行つて感謝することを忘れないし、廊下一つ掃除するにしても、お役目でする掃除と違つて、建物に感謝しながら、従つて建物に報恩するつもりで掃除するので、自ら廊下も光つてくる道理である。

それよりも月影寮で最も苦心するのは、何んといつても張り切つた大勢の娘さん達の和合であらう、指導者片山さんの苦勞もここにあらう。

第一の禁物はお互ひ同志の喧嘩である。女三人寄れば姦しいとかいはれる位に、女は口が多いとされてゐるので、最初から他の惡口を絶対に禁止されてゐる。それでも長い月日には、多情多感な娘さん達である、色々なことがあつて起角面倒なことが起り易い。



月影寮での夜の動行は、講堂に集つて一同佛前に向つて勤めるのであるが、この動行の終りに、面倒なことのあつた時には解決を與へるのである。

片山さんが眞中に座り、その後ろに一同が

列んで動行を勤める。これが終つて、普段ならば片山さんが訓示をするのだが、何か問題のある時は、その事について述べる。勿論述べる片山さんは佛前に向つたなりで、寮生一同には後ろ向きのまゝである。例へば「今日これこれのことがあつたが、私はこれには反駁で、かくの如く考へる」とかいふやうに片山さん自身が、その事件について内省をし、その内省した事柄を述べる。又時には明かに「これこれは悪いと思ふ」と断定することもある。片山さんが心から深く考へ、その考へを述べるのであつて、單なる叱言ではない。すると大抵の場合、いや殆どの場合が、それだけの誹話でことが落着し、又もとの和合と協力の姿に戻つてゆく。

これで問題が解決するといふのは、つまり片山さんの氣持なり、考へる心の中なりが、寮生一同のそれと大略違つてゐないといふことを示すものである。それなら何故こんなに容易に一同が同じやうな氣持になれ、片山さんの内省が寮生の内省と相通するところのあ

るものとなるのか。片山さんが寮生と毎日起居を共にし、寮生の氣持を知つてゐることであらう。片山さんが長年指導に任じてゐる爲でもあらうが、又それよりもその根本はお念佛である。容易く氣持が一致するのは、お念佛を申す和光同塵の特色でもあらう。

片山さんの「お念佛を申さないで云ふお小言は効き目がありません」といふのは、全くこのことを示すに外ならない。そして片山さんが、何か困つた場合、苦惱の中に沈まんとするやうな場合は何時もお念佛で救はれる。斯様な場合はただただお念佛を申してお纏りするといふ。

云ふは易く行ふは難い。殊に人を指導するものは技術や才能ではなくて、その人の人格である。指導者にお念佛のなくてはならぬことは云ふまでもない。片山さんはたしかに、黙々としてお念佛を申し、實行し、人を指導するの大任を立派に堪えてゐる人である。

(寫眞は推尾博士を囲む寮生達、第一列右から二人目が片山さん)



談相仰信

信仰の進歩について

問

彌陀の本願を
願信して、自

然の念佛が口を御いて出ることが、信仰の出
發として、毎日毎時同様の繰返しをして居て、
少しも進歩細路を辿る様子が見せませんが、
恐らく臨終まで之れでよいのでせうか。一年
生から六年生までの卒業と云ふものはないで
せうか。つまらなく淋しさを感じます。

(東京・荏原・求道生)

答

本願が信じられ、自然に念佛が口
御いて出るなら、もう立派な信仰

であつて、つまらないとか、淋しいとか云ふ
氣持は起らない筈です。つまらないのはまだ
本ものになつて居ないからであり、淋しいの
は如來様から離れて居るからではありません
か。

何うしても仲間が思ふやうに殖えて呉れな

いとか、心からなる共鳴者が少ないとか云ふ
淋しさはあつてもよいと思ひますが、自分の
信仰そのものが、唯だ單に繰返へしであつ
て、其處に變化もなく無信時代と同じである
爲に、それで淋しくつまらないのであるなら
ば、まだ信仰が概念であり念佛が機械的であ
つて、本當に情意まで動いて居ない證據で
す。信する者に取つて少くとも念佛は繰返し
ではありません。その一聲一聲が新しいの
です。如來様に「南無」して行く氣持はいつ
でも「もつと深く、もつと強く」と望まれこ
すすれ、決して「繰返へして居てつまらな
い」と云ふ氣持にはならない筈です。
信仰の進歩と云ふのを何か特別の心境でも
開けるものかと思つて居られるのではありま
せんか。それならそれも大きな間違ひです。
感情が情操になり情操が意志になつて行く。
それだけが進歩過程です。具體的に云ふと、

擔 當
中 村 辨 康

始めはただ救ひの實感に對する喜びの感情で
一杯になつて居りますけれども、段々心が落
ちつくに隨つて「安心立命」と申しますか、
心に確乎不拔の心樞が出来、すつかり氣持が
安定して、如來様の光の増すことならば死も
亦た辭せない程の覺悟も出来、其處に信仰上
の貞操が成り立ちます。さうなると今度は如
來様の御仕事の萬分の一でも御手傳ひさせて
置きたい氣持になつて、世の爲め人の爲めに
と志すやうになります。それが信仰の意志
です。さうなると猶更自分の無力さが痛感さ
れて、佛へ佛前でなくとも、或は人との對談
中でも、或は手紙を書いて居る時でも、或は
他の仕事をして居る時でも、或は清らかな氣持
や間違つた氣持が起つた時でも、人知れず、
念佛して如來様の護念を御願ひし、如來様の
照鑑を頼む氣持になるのです。外目は如何様
ともあれ、常に念佛心を忘れないやうになる



談相仰信

のが進歩の實證であります。あなた自身の心
 狀をよくよく見つめて下さい。特別なものを

三國佛教の異なるわけ

問

佛教の發祥地印度は英の支配下に
 ある。即ち獨立國家としては其の
 存在を認められない。支那は嘗ては國教視さ
 れる程、佛教の黄金時代があつたやうであ
 る。その支那は蒋介石一派の共產政治の極權
 に其の特異性は失はれ、皇國の庇護の下に漸
 く昔の支那に復し、加之、正しき思想の極
 頭と共に、着々新報の第一線に向ひつゝあ
 る。この間、新聞等に依れば、日本佛教の大
 陸政策の着々進歩を知る。

日本文化は佛教渡來
 後、始めて爛熟の域に
 到つた如く、攝政、聖
 德皇太子様の佛教に對
 する深き御理解、歴代

要求するのは一種の邪道におちたのです。早
 く健康體に立ち還らないといけません。

禁裡の御仰信、爲政者の理解ある處置に依つ
 て現在迄に至つたやうである。

我々は日本渡來前に、印度、支那及び諸國
 に於て、燦として輝いたにちがいない佛教が、
 國體の安寧を保ち、各々國家自體をして泰山
 の安きに置かしめざりしを知る時、日本のそ
 れと同じ釋迦の御教との比較相違を考ふるの
 である。即ち日本佛教と印度、支那の滅亡諸
 國の佛教とは同一でないことと思ふ。然らざ
 れば吾國は印度支那のそのやうに滅亡では
 ないにしろ、國民々々の退嬰を來して居ると
 思ふ。又神宗や眞言宗等は支那産であるが、
 日本産、純國産の淨土宗などは國民的要求に
 應合した爲、現在まで其の發展を來たしたも
 のと思ふ。同じ釋尊の教がそんなに變つてよ

いものであらうか。又日本精神の特異性を現
 在まで助長せしめた日本佛教の應説及び將來
 の展望を御きかせ願ひ度し。

(京都・太秦・一讀者)

答

印度は佛教を産んだけれども、遂
 に理解し得ず消化し切れませんでした。
 の殘骸を産して居る有様です。然もそれは形
 骸だけであり形式だけであつて、實質的には
 佛教は産つて居ないと云つてよいのです。阿
 育王や迦膩色迦王時代には國教化した時であ
 りましたが、其の勢力を弱めるには宗教を驅
 逐しなければならぬと云ふことから、回教
 や印度教の勢力を増大せしめて佛教の驅逐を
 圖り、遂に其の目的を達したのです。其の驅
 手の大きいのは特に十七、八世紀頃から英
 國だつたのです。無論印度大衆の教養が低
 く、功利的な低級の宗教でなくては受入れる
 だけの力がなかつたことも一原因ではありま
 せうが、その教養を高めることを妨害すべく



談相仰信

故意に教育施設をなさなかつたのが事實であり、現に讀みかきの出来るのは千人に對して八人位だと云ふ話でありますが、これではその國家滅亡の罪は佛教が負ふべきものではありませんまい。

また支那にしてもさうです。支那は早くから開けて文化がかなり進んで居りましたから、印度から取り入れたものは、主として佛教及び佛教關係の文化であつて、他の文化ははいるだけの餘地がなかつたのです。無論佛教の最初は翻譯が重要な仕事でしたが、それから以後多くは理論中心であつて、色々な宗派が出来ました。然し結局具體的實踐的な禪と念佛とが残り、禪念佛の現狀となつたのです。

隋唐の文化は支那文化の最たるものであり、そしてそれは云ふ迄もなく佛教文化です。またその以前の漢魏六朝時代の文化、その後の宋の時代の文化、皆な佛教が關係して

居り、魏隋唐宋の文化は佛教の結んだ實でもあります。けれども何れも度々迫害を受けて折角の文化も時々悉く破壊し去られたのです。謂ゆる「三武の破佛」はその最も代表的な最も苛酷な排佛だつたではありませんか。要するに支那も佛教を消化し切れなかつたのです。受け入れる程の力がなかつたのです。だから現在の支那佛教が形式佛教であつて民衆と何の關係がないのは當然です。つまり支那の僧侶は「世捨て人」であり「方外の者」であつて、國民たちの義務もなければ權利もないのです。

其の上、印度も支那も國民全體が統一された事がありませんでした。たま／＼有つてもそれは短い期間であつて、極めて稀な事實です。多くはバラ／＼であり無統制であり無秩序でありましたから、佛教が國教的役割を演じた時があつたにもせよ、隨く深く民衆の心の底へまで浸み入るだけの條件とはならなかつたのです。

然るに我が國は上に萬世一系の皇室を戴

き、千代八千代にかはることなき御仁慈の下に、國民は喜んで統制ある生活を含み、教育に産業にあらゆる文化を育成して來たのです。外來文化も取り入るべきは取り入れて之れを肉となし血となして來たのです。

大體國柄が他の國と違つて居ます。佛教渡來後五十年にして、聖德太子は佛教の「三寶」を以て國民教育の大本とせられ、其後奈良朝では國分寺國分尼寺及び國師の教育機關を定められたばかりでなく、子女教育の爲に各家に佛壇を置くことを勅命せられた如き、國民の教育に重きを置かれたことは、印度や支那のそれと比較して天地雲泥の相違があるわけ

です。從つて我が國に於てのみ佛教の發達が促されたのは理の當然です。印度でも支那でも一時的發達はあつたでせうが、皆な挫折させられて居ます。

このやうに印度に發生した佛教と云ふ木は、支那にも挿木され、日本にも挿木されましたが、印度の原木は枯れ、支那の木は根を



談相仰信

おろしたけれども日陰育ちで、ひよろ／＼です。獨り我が國のものだけが繁茂したので。だから同じ種族の族であつても育ち方が違ふのであり、國家に對する影響の相違するもの敢へて不思議ではありません。

また天台眞言禪等の支那傳來の宗派も、支那傳來とは云へ、日本本土に移植した限り支那のそれとは皆な異つた發達を見せて居ります。支那の眞言は喇嘛教でせうが、それは眞言ではなくて「密言」です、禪宗だつて坐禪はするが、多くは形式的な律宗です。このやうに皆な支那のものは退化して居るのです。日本のはダンガン發達したのです。

之れは畢竟日本の國民性の然らしめたものです。西村博士は日本國民性の特異性を「ほれやすい」と「さめやすい」の二に分けて論じて居られますが、その「ほれやすい」のは

何でも一應は受け入れて見る「抱擁性」を意味し、その「さめやす

い」のは一旦受け入れて見ても滋養にならないものはき出す「選擇性」を意味するものです。佛教は日本精神を助長せしめたものではありませんが、日本精神も亦日本佛教を助長して來たのです。次に御覽ねの「日本佛教の

薤珠經とは何か

問

前に御覽ねした「薤珠經」は觀山陽の詩の中にあるもので、その原品の篆刻物が私の宅にありますから承知して置きたかつたのです。その詩は「月明孤鶴眠三前江一樹寒松護三石屏」香家已消童子倦、道人猶對薤珠經」と云ふのです。然しお判りにならなければ何れでもよろしくあります。(門司市・谷町・増野)

答

一見詩を見ただけで、道教關係と云ふことは明了ですから、支那研究をして居られる早大教授の禪井先生に御覽

「經説」は一冊の本にもなり得るもので、此の體で言ひ切れる譯もありませんから、少し御無理な注文です、また將來の展覧などに到底私の力の及ぶところでありませんから、何處か學者の方におたづねを願ひます。

ねしましたところ、古來道教の事を玉經、丹經、寶經、薤珠經などと色々呼んで居るのであり、薤珠は靈草奇珍を云ひ、轉じて道教の經典の別名になつたもので、固有名詞ではありませんとの事でした。また唐の鮑溶と云ふ人の詩にも「道士夜誦薤珠經」とあり、道教の廟宇をも薤宮と稱するが、それは薤珠宮の略稱で、北宋の仁宗の天聖八年に薤珠宮(宮中の一殿)に宸したことは、詩人に傳へられて居るとの事です。

以上は禪井先生の御解答の大要です。

合に依つて一家を繼めて東上多年に亘る鹿兒島に於ける輝やかしき歴史を中斷して各位とお別れしなければならぬと述べた。來賓鹿兒島新聞主筆小原驥馬氏はこの後を承けて立ち、約三十分に亘る激戦の贈呈式が行はれた。小橋氏再び起ち鄭重感謝の辭を述べたが、鹿兒島支部の開拓者として大きな足

跡を残した小橋氏の去つた後の同會支部今後の動向こそ本會の最も懸念する所であつたが、幸ひ會員の自發的議議の結果、後任を富岡鴻道氏に委嘱し、谷山大佐を顧問に及び前記諸氏の外、奥善安氏を加へて幹事となし今後一層の擴充發展を期することとなつた。尙當

先づ贈呈義清氏の挨拶に始まり、次で中村理事の經過報告、小林圓達氏の事務報告あり、これが終つて一同夕餐をともしつゝ懇談に移り、鑑仰會の飛躍的發展を期するための諸方策について意見の交換を行つたが、結局本部に於てまず一會の發展に努力するとともに、京都支部並に維持會も亦いよいよ積極の後援をなし以て目的達成に邁進することを約し、午後九時半頃盛大裡に散會した。

日の列席者には曾て小橋氏が雜誌『南華頂』を發行した四年間その帶封五萬枚の揮毫を奉仕した篤志家西村正一氏並に刻苦勉勵三年間の日子を費して、油繪法然上人聖像の完成に盡された洋畫界の先輩者伊達孝太郎畫伯夫妻を初め、多年同氏に親炙した人々多く孰れも心から訣別を惜しむ人のみであつた。特に伊達畫伯は小橋氏を徳とし、同氏懇囑のF8號櫻島の油繪を餞別として寄贈した。櫻島の風光から受けた忘れ難い感化は同氏を遡る多くの人々も無意識に多くの感化を受けたこと勿論であるがこの鳥影を中心に親しみ深い人々を想念したいといふ氏の志向は全幅に仰がれるものであらう。彫心の櫻島根を偲びと繪にもかゝせて今日はゆくなり」と同氏の感懷はさすがに深い。(寫眞は記念撮影)

積極の後援を約す

京都維持會懇談會

京都教務所で開催

紀元二千六百年記念たる一宗法要や綜合教化大會の興奮未ださめやらぬ京都教務所に於て、去る五月八日午後六時から法然上人鑑仰會京都維持會世話人主催のもとに常務理事中村兼康師を中心とする

同會維持會員懇談會が開催せられた。この日百數十名の會員を有する京都維持會は連日の忙務にも拘らず小林圓達、鹽竈義清、大河内貫靜、信原良哉、石橋誠道、田中龍定諸氏を初め多數の會員出席し

時半頃盛大裡に散會した。

さすがに深い。(寫眞は記念撮影)



石の上に重散り咲く古城かな

堺市 笠井 松枝

評 葎が咲いてゐることから此の石は相當に大きなものであり、時代のつてゐるものであることが想像せられ、如何にも古城らしい葎の花の盛しきは、それにふさはしい可憐なるローマンス、なる此の城から思ひ起さしめてくれる

南文 古川 喜作

春の雲見上げて重き帽子かな

評 私などは、外套が特に重きを加へてきて、それに依つて春を感じるのであるが、此の句の場合それが帽子の重きに依つてゐる。作者が出征してゐたのであるから、或は鑑定かも知れない。雲を見上げるといふ、不圖したことから春を意識し、しみと春を味はつてゐる所がある。

八幡市 森田 雄次郎

色濃く煙交りて霞みけり

評 平凡から非凡を得ようとしてゐる心を賞したい。黒く濃い煙が霞と交つて霞に上りこんでゆくところ、おほらかなる春を感じしむるもの良い。

小樽市 西田 喜四郎

涙星いくつか春の雨あがる

大分縣 石 堂 柑山

開き初む木の芽に月の暈めして

木の芽晴白きベツトを起きて見る

白根縣 上野 博康

連に夕陽ちらばり河鹿鳴く

栃木縣 大輪 云海

白魚を掬ひとる手の太きかな

新潟縣 北出 皓月

椿落つボタと重たき音のして

小樽市 平井 善慈

啞の子の囁せはしく風の春

東京市 三野 輪幸節

新緑や弊害多きことばかり

山梨縣 程 原津谷

梅雨ふかくぬ手にするものゝ

名古屋市 福田 淳雨

待てば来ぬ郊外バスや青嵐

北支那道車 渡邊 明道

雪の夜に眼がうつるかと見張るかな

小樽市 井口 謙

矢車に薫風強き日を祝ふ

大阪府 日根野谷記三弘

女の童謡あやして蓮華草

水仙や病めば氣弱く留守の妻

徳島縣 齋藤 華舟

干竿は子のものでばかり落花しきり

横濱市 小宮 昌平

餅を搗く音に春眼覚めにけり

東京市 藤 金

たんぼへの信濃路にして雪の山

滋賀縣 重野 ふみ子

入根に若葉の間の暮れかゝる

香川県 荒木 はち

散りてより地上のものや紅椿

岸智市 田中 秋芳

つばくらめ来て賑はへる巷かな

東京市 長島 恒次

白蝶の風とたゝかふ窓邊かな

神奈川縣 深瀬 益吉

波の色春となりたる土手に立つ

小樽市 中村 もん

鈴蘭の葉も添へられて蜚夷だより

新潟縣 山田 隆子

あきらかに大さ堤の野火の跡

佐賀縣 宇都 隆

そこかしこすれゆく今朝の霧

靜岡縣 青柳 貞行

茶畑のめをとの唄ひ摘みにけり

京都市 水田 七郎

富士山の上に躍りて鯉鱈

新緑の嶺何處までうらゝなる

徳島縣 海部 山人

寒の出穂盛りをひびりなきしきる

横濱市 小宮 昌平

麥の波青々として五月風

北海道 押野 尚秀

鯉焼く匂のつよく雪解道

新宮市 竹中 八洲子

風邪あとの氣儘休みの婢かな

京都市 福島孝治郎

春霞練兵の聲高らかに

盛中州 呂 金 水

尼寺の春燕衣着て庭を掃く

崔 宗 顯

飛ぶ雲になにかありげに揚雲雀

京都市 多郎 喬登秋

御詠歌の遠くなりゆく春野かな

滋賀縣 重野 ふみ子

新しき墓標に春の雨ふれる

北海道 長尾了 國

抱えゆく大羽子板や花の袖

大阪市 渡邊 逸直

機銃うつ童に青葉若菜かな

北海道 花田 順佐

響き来る木魚の音や夏木立

宮園はがきに一同二句以内とし「淨土」關聯部俳壇係あてに送ること。

投稿規定



存在相より生命相へ

般若心經講義(第五講)

中村 辨康

(七) 般若の眞空

舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識、亦復如是、

舍利子よ。色は空に異ならず、空は色に異ならず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受も想も行も識も亦た復た是の如し。

舍利子(鷲鷯子と譯す、舍利弗とも云ふ)

觀音様の話相手であります。なぜ「舍利子」と名付けたかと申しますと、お母様は目が非常に美しくして恰度鷲の涼しい眼のやうであつたから「舍利」と云はれて居たので

すが、その舍利の子であるところからかく呼ばれたのです。極めて聰明な人でありまして釋尊の片腕としてお弟子の中でも「智慧第一」の稱があつた位でした。世界中の生きものをみな人間にしてしまつて、その數知れない人間の智慧を集めても舍利弗の智慧の十六分の一にも當らないといはれる程の智者でした。お母様が此の人を懐妊した時、偉い學者と議論しても常に勝を得たさうですが、お腹の中に宿つて居てもそれ程えらかつたと云ひます。釋尊の教團の中でも目連と共に理想派の人で釋尊よりも早く死にましたが、若し此の人が長生きして滅後の教團を率いて居たら、印度の佛教ももつとちがつた形で發達したでせうに、誠に惜しいことであります。この舍利弗と目連が阿說

示の導きに依て、二百五十人の弟子達と共に歸佛した時、釋尊は二人を見て

「拘律陀（龍）と優波提舍（議論家）が來た。我が教團の上首となるであらう」

と云つたと傳へられます。また他の弟子達が釋尊から教を受ける

「委しいことは舍利弗から聞くがよい」

と云はれて、常に佛の説を復説したり宣教したりして居たのです。

此の智慧者がいま觀音様の御相手となつてお話を聞いて居るのです。そして五蘊皆空の御話を神妙に聞き入つて居るのです。

色不異空

觀音様は先づ五蘊を代表する色蘊だけを擧げて、

「色蘊と云つても、それは物質のかたまりが個在するのではなく、因縁の和合に依つて生起したものであるから『空なる状態』に均しいものである」

と述べられました。

即ちそれは

色（物質）
空（空なる状態）
不異なるもの

であることを云はれたのですが、梵語の「スニヤター」を單に「空」と漢譯したので、私達日本人には意味がよく分らなかつたのですが「スニヤター」は「空」であり「ター」は「状態」を指すのですから正しくは「空なる状態」と譯すべきであつたのです。即ち「固定存在ならざる姿」と云ふ意味であります。

之れは主として私達は此の五尺軀を「我」と思ひ込んで居りますが、それは「和合態」であつて「固定體」ではないと云ふことを説明せんとするものです。

釋尊が鹿野苑で初めて説法せられた時、四諦八正道を説いた後

若し「色」が「我」ならば私達は病氣にかゝる筈がない。然し「色」は變化しないものではないから「自我」ではない。だから人は病氣にも罹るのである。

又「我」と云ふものが「色」をして、かくあるべし、かくあるべからずと考へても、考へ通りにすることは出来ない。

私は御前に尋ねる。

色は無常なりや常なりや。曰く、無常なり。無常は苦なりや樂なりや。曰く、苦なり。苦にして無常なるものを「我」なり「我がものなり」となすべきや。曰く、否。然らば内外、粗細、勝劣、遠近に拘らず、色は自我に非らずと知り、如實に眞實の智慧を以て見るべきである。と、次々に他の四蘊に就いても同じやうに説明して、「諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂」の理を説かれたさうですが、之れも畢竟はこの「色不異空」の理を物語られて居るわけであります。

空不異色

既に色と空なる状態とが同一であるならば、空なる状態を「色」と見てもよいではないか、と云ふのが、今度の「空不異色」であります。然し前の「色不異空」の「色」と今度の「色」とは言葉は同じでも其の内容は異つて居ります。即ち前の「色」は私達の感ずる物質そのもので、現に其の目の前にある不變化らしい箇々の實體を指して居りますが、それを今は「因縁の和合」に依つて現れた空なる状態」としての眞實相を見たのですから、その「空なる状態」として感ぜられた「色」が今度の「色」なので

す。だから其「色」は「空」に即したもので「二にして一」「不異にして不二」なるものと云はねばなりません。

色即是空、空即是色

此の故にそれは「即是」の關係にあるものであります。

色——事——事と理と即是するもの
空——理——

から見るのが「色即是空」であります。

蘭溪禪師は

「空は色の體にして色は空の用（はたらき）なり。萬波水を離れず」

と云はれましたのもそれです。また大般若經には諸法皆是因縁生。因縁生故無自性。無自性故無去來。無去來故無所得。無所得故畢竟空。畢竟空故、是名般若波羅蜜。

とありますが、この「事」と「理」とが即是の状態であるから、單に「事」のみを見て之れに執着せず、よくその眞相であるところの「理」を知つて、物事にこだはらないやうに生活すべきことを教へたものであります。

然し之れは「理」の上に立つての考へであつて、兎もす

れば「平等視」に入り込み、悪く悟りまして、人を人とも思はず人を喰つた形となり、世の中を屁とも思はぬやうになり勝つのです。是れではいけません。それは「悪平等」と云つて非常に嫌ふことであり、却つて害毒のあるものです。悪い差別觀念もいけませんが悪い平等觀もいけません。共產主義や自由主義は皆かうした誤謬から出て来るものと思ひます。

物質は凡て色々なものの綜合結成なものですから、常に一定不變の形を持続することは出来ません。時が來ればこれはもするし、老廢もします。だから其の眞相は「空なる状態」なのです。ことに科學の説明するところに依れば「電子」の配合及び振動に依つて原子が出來、その原子の集成が「物質」となつて居るのだと云ひますから、其の「物質」の根元は陰陽の電子であり、電子は決して甲乙丙丁等の異りを持つて居ないので、結局同じ電子の數量とその結合と振動との相違から、個々の「物」が異つて現はれて居るのに過ぎないのであつて、元を洗へば平等のものではありません。是の故に「色即是空」の原理は科學の上でも否定出來ないことであります。然し、既に異つた形として現に現はれて居る以上、例へば金と水銀とは同じ價値のものではあ

りません。金は水銀より電子一箇が少くないから、水銀から電子一箇を取り去れば金にすることが出来る譯で、長岡半太郎博士は此の理にもとづいて水銀を金とすることに成功したさうですが、よしから云ふ實驗に依て實證されても、金と水銀とは決して同價値ではありませんし、同じ効用のものでもありません。電子其のものに變りはなくとも、事實が異つて居るから「空即是色」であつて、その根本の眞相は電子なる平等のものではあるが、水銀は水銀としての「色」であり金は金としての「色」で全く差別相を示して居るものです。

此の故に「色即是空空即是色」は「差別即平等平等即差別」と云ふことを言つて居るものであります。

之れに就て古來水と波との關係に譬へて説明して居ります。例としては少々まづいと思はれないでもありませんが、御參考までに申して見ますと

(第一段) 波は存在(有)であるが、然し縁に依つて水が變化して起つたものだから、不變のものではない。して見れば波は無性であり空である。

だから色は即ち空である。(現象を中心としての考察)

(第二段) 波は無性であり空であるけれど眞空ではない。

なげなれば、波としての現象だからである。既に現象で有るとすれば、それは非存在ではなくして存在(有)である。(無性の理を中心としての考察)

(第三段) 水は即ち波であり、波は即ち水である。だから

即水即波であり、即有即空である(一體二義視)こんな歌があります。

白露の已が姿を其のまゝに紅葉に置けば紅の色

即ちたくみに色即是空々即是色の相を言ひ現はして居ります。

受想行識亦復如是

これは今の「色即是空空即是色」の客観的な物質と同じやうに精神的なものもまた因縁に依つて現はれるものであるから、永久存在するものではなく、本體的には「空なる状態」に過ぎないのであり、本質的価値は同一であり平等であることと、それが同一であり平等ではあつても、當面の事實としては、因が異り縁が異つて現はれたのであるから、差別は差別のまゝに之を認めざるを得ないことを云ふ

ために、今の「色不異空空不異色色即是空空即是色」と同じやうに

受不異空空不異受受即是空空即是受
想不異空空不異想想即是空空即是想
行不異空空不異行行即是空空即是行
識不異空空不異識識即是空空即是識
であると云つたまでのものであります。

(八) 空の内容

舍利子、是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減。

舍利子よ。是の諸々の法の空相は生ぜず滅ぜず垢つかず淨からず増さず減ぜざるなり。

是諸法空相

佛教では一切の事物諸現象を「萬法」とか「諸法」とか云つて「萬物」若しくは「諸物」とは云つて居りません。そして外形的な意味を主とする場合には「諸行無常」と云ふやうに「行」の字を用ひ、内容を主とする場合には「諸法無我」とか「萬法皆空」とか云ふ言葉が示すやうに「法」

と云ふ文字を使用して居るやうです。

蓋し「行」とは「作用」のことで、一切のものは「推移」し「變化」しつゝあるからであります。

また「法」とは「方法」とか「理法」とか「法則」とか云ふ熟語が出来て居る通り、ものが推移し進行し行くべき規範を云つて居る場合もありますが、また其の規範の精神的な中心的な意味を取つて「法印」とか「法身」とか「法眼」とか云ふやうな用ひ方をする時もあります。

これを日本語で云ふと、第一の場合は「のり」で人が「乗り」「又は乗取」らねばならぬものであります。第二の場合は其規準に「乗」れば、結果として正しく活き得られるから「いきる」と云ふ意味になります。そしてそれはまたその意味を押し廣げて、一切の事物の真相を素直に見れば、ものは皆な活きて居るものであり進動して居るものであるから、凡ての諸現象を置かれたものと見ず、變化其ものと見て萬物を「諸法」と云ふ言葉で云ひ現はすのであります。

随つてその萬象の法の眞の相は決して固定しないところの「空なる状態」であると云はねばなりません。だから「諸法の空相」と云つたのであります。日本語で云へば「一切

の諸現象は外見上ではものとして取り扱はれて居るけれども、その内面の眞の姿は流れ行くものであり、生命的なものである」と云ふことを言はふとして居るのであります。そしてその内容を否定的な言葉ではありますが、外に説明のしかたがありませんので、止むを得ず「六不」を以て總括的には「存在觀」を否定し、細目的には「質」と「量」とに就いての「差別觀」を否定して、その真相を指示して居るのです。

不生不滅

凡てものは「縁（條件）」に依つて推移し變化し進展して居るものであることは既に繰返して申した通りです。

例へばこゝにもみの種があるとしまして、そのもみんねが時かれて水分と熱と光りとが（即ち縁が）加へられなくては芽を出しません。それに更に空氣や養分や時間などが加へられて稲の草となり、それが生長して穂が出で花が咲き遂に實つて米と云ふ種子が出来ます。

だからものそのものは單獨では生滅するものではありません。縁に依つて生滅して居ります。然かもそのもの生命、稲草の生命、稲穂の生命、米の生命は、本質的には、

新らしく生れるのでもなく滅したのでもありません。唯だ「縁」に随つて素直に流れ流れて變化して居るだけであります。是の故に外見上の存在だけを見てそれに捉はれず、其の内面に見える姿である生命に眼を注がねば眞實の相を見たものとは云へないのです。

不垢不淨

一切のものが私達に認識されるのは、私達の感覺に依るからであります。だから純粹の感覺、純粹の認識では、きたないとかきれいとか云ふやうな感情を超越して居る筈であります。いや、超越と云ふよりも認識そのものは「感情以前」のものであります。

然るにそれを垢淨とか美醜とか好き嫌ひとかの感情を差別して居るのは、畢竟こちらの得手勝手であつて、自分の氣に入つた場合は「あばた」も「ゑくぼ」に見え、氣に入らぬ場合は善意を惡意と誤解することが往々にしてある譯です。卑近な例ですが、他人の食べかけはきたないが、自分の食べかけはきたないともきれいなとも感じて居りません。畢竟それは私達の受取り方が色々と差別的感情を動かしてさう思はせて居るのに過ぎません。

不増不減

また私達の認識は經驗に依つて濃くなつて行きます。この故に認識の量は段々増して行く譯であります。そして場合に依つては今までの認識が誤りであつたことが明らかになつた時、それは訂正されても行きます。

とは云へ、私達の經驗は一度に現象の全部を寫し取ることは出来ません。一面しか取れないのです。云はゞ寫眞が平面的にししか撮れないのと同じです。ところが私達は度々經驗を繰返して色々な面から見たり觸れたりして居る中で、經驗の瞬間に過去の諸經驗が結び付いて、比較的に事物の全相を把握し得て居ます。だから經驗の多い人ほどよい譯で俗諺にも「烏賊の甲より年の効」と云はれるのも無理がありません。

然しながら、それも畢竟は認識が豊富であるか否かの相違があつて、ものそのものの増減ではありません。

また物理學では「エネルギーの不滅」とか「物の不滅」を教へて居りますが、それから云つても「變化」は認められるけれども生滅や増減は認識されません。例へば水は常溫常氣壓の時は液體でありますが、高溫低氣壓の時は氣體

となり低溫高氣壓の時は固體となることは誰でも知つて居るところで、また水には他のものを潤滑す力があり、冷す力があり、上す力があり、流す力があり、壓す力があり、廻す力があるかと思へば、この反對にものを乾かす力もあり、火を出す力もあり、火を増さしむる力もあるので、色々に利用されて居りますが、さればと云つて水其ものに變りは少しもありません。

ですから、私達は眞相をはつきり把握するには「存在相」として見るべきでなく「生命相」として常にそれを善用し活用して行かねばならぬ譯です。

然るに私達は凡てを存在相として見ることに馴れて居りますから、そこに常に執着があり感情の濫用があつて、苦樂から抜け出ることが出来ず、始終あやつり人形のやうにおどらされて居るのであります。

此の故に一々の事々物々にさうした達觀の出来ない私達としては、何うしてもさうした個々の生命相の諦觀よりも、個々の生命相の根元たる無量壽の如來を我が心の宮殿に勧請することが最もよいことであり、手取り早いことであると云はねばなりません。

茲にも淨土教の信仰の特性を見ることが出来ませう。

S.S.S.

すて賣亂の金はンベ金

！をンベ金合スエンスるにンベ金



¥150以上

筆年萬合金・スエンサ ★

編輯後記

◇いろ／＼の運動もあります。今や寡言實行で、卒業して垂範する人だけが要る時期です。

◇少し位の物資不足で不平不満を云ふ者は時代の落伍者でせう。

◇吉田社二郎先生にはお忙しく且つお身體の悪い折、押して玉稿をいただき深謝いたします。

松岡俊三氏の「華やかならざるもの」は現在誰もが必要な心掛けでありませう。増谷文雄氏の「宗教的なるもの」は同氏が毎月各府縣に於てその青年會座談會を同會します。その折の實見談で、今後も執筆して下さることになつてゐます。

◇信仰相談に投書なさる方は、もつと簡單な内容にしてください。中村辨康先生も精しく解答

したら一巻の書になる。つてゐられます。そして何んなことでもドシドシ御質問下さい。但し紙数の關係で掲載の遅れた場合は御諒承願ひます。

◇會員通信を御投稿下さった諸氏に御禮を申し上げます。その内に成るべく多數の通信を掲載するやう工夫します。本誌には多くを載せられなかつた點を投稿された諸氏にお詫びします。

◇種々の御忠告、御鞭撻をいただき誌上から御禮申し上げます。今後とも會員の聲として御意見を

お寄せ下さるやう願ひします。

◇五月から辻重光氏が本部庶務主任として事務を執つて下さることになりました。同氏は長く中支方面で奮戦され、この二月に無事歸還された勇士で、同氏によつて事務の刷新が期待されます。

◇御通信下さる際には住所を名記して下さい。

◇本會出版物の御註文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番。

◇御註文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭にお書き下さい。御送料をお忘れなき様願ひします。

◇勝手乍ら代金引替は一切お断り申上ります。

◇その他の問合せは往復はがきかまたは返信封封で、御願ひします。

◇會員で御住所變更の方は現住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◇本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合願ひします。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社
東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 六月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和五年五月三日印刷納本

昭和五年六月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順

發行人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讀仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ヶ年 (送料不要)

淨土宗普賢

郁芳隨圓猊下序

大野法道
中村辨康
前田聽瑞
共著

淨土宗讀本

菊版四五〇頁・總クロース装
本文五號バラルビ
挿繪寫眞入
定價二圓五十錢
送料二十二錢

「淨土宗讀本」内容

第一編 歴史

- 第一章 釋尊の生涯
- 第二章 佛教の發達
- 第三章 法然上人傳
- 第四章 二祖から現代まで

第二編 教義

- 第一章 淨土の教義
- 第二章 信仰の對象
- 第三章 西方の淨土
- 第四章 信仰の獲得
- 第五章 念佛の意義
- 第六章 信仰の生活

第三編 實踐

- 第一章 生活義としての念佛
- 第二章 信仰を方向づける爲の宗派と寺院
- 第三章 寺院の構成及び機能
- 第四章 信仰修養に必要な諸準備
- 第五章 信仰修養法としての行儀
- 第六章 人生の最大儀禮
- 第七章 彌先への報恩行
- 第八章 信仰増進の方法

淨土宗の教義は？ その實際は？ その歴史は？ その現狀は？ つま
い淨土宗が持つ凡てのものを、萬人に解るやうに、立派な體系のもとに説
いたのがこの讀本です。しかも執筆者は現淨土宗の第一流理論家と信仰家で
永く後世に残る定本とするために何回も何回も協議を重ねて、苦心練磨の結
果出来上つたものです。校正も印刷も製本も慎重を期してやりました。です
から、信頼して讀める上に、淨土教義に就ての正しく廣い智識が得られ、書
架に飾つて恥しからの書物です。正しい教義・信仰を求められる人、淨土教
に就いて知り度い人々は勿論、宗教とは何かと迷はれてゐる人、時局下僧俗等
しく自己の信仰を確固たる體系の上にすへるために讀んで頂き度い讀本です

一家に一本！
明るい家庭！

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

淨土第六卷 第六號

定價 金十二錢 (送料)
外埠定價 金十三錢

昭和十年五月廿日第三機郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十五年五月廿日印刷納本 昭和十五年六月一日發行